

「アナニヤの奉仕」

使徒9：10～22

1. はじめに

(1) ダマスコ途上で復活のイエスに出会ったサウロは、盲目になった。

①使9：8～9

Act 9:8 サウロは地面から立ち上がったが、目は開いていても何も見えなかった。そこで人々は彼の手を引いて、ダマスコへ連れて行った。

Act 9:9 彼は三日の間、目が見えず、また飲み食いもしなかった。

②この三日間は、悔い改めと祈りのために用いられた。

(2) サウロを窮地から救う役割は、アナニヤという弟子に与えられた。

①神は、普通の人を用いて御業を行われる。

2. アウトライン

(1) 主とアナニヤの対話（10～16 節）

(2) アナニヤの従順な行動（17～19 節 a）

(3) サウロのダマスコでの伝道（19b～21 節）

結論：サウロの宣教の本質

1. 神学的土台

2. 宣教の対象

3. メッセージの内容

アナニヤの奉仕について学ぶ。

I. 主とアナニヤの対話（10～16 節）

1. 10 節

Act 9:10 さて、ダマスコにアナニヤという弟子がいた。主が彼に幻の中で、「アナニヤよ」と言われたので、「主よ。ここにおります」と答えた。

(1) アナニヤは、ユダヤから逃れて来た弟子のひとりではない。

①最初からダマスコに住んでいた弟子のひとりである。

②この時点で、福音宣教がダマスコにまで及んでいたことが分かる。

*その経緯については、ルカは記録していない。

③使22：12

Act 22:12 すると、律法を重んじる敬虔な人で、そこに住むユダヤ人全体の間で評判の良いア

ナニヤという人が、

④彼は、律法を重んじる敬虔なユダヤ人で、ユダヤ人の間で評判がよかった。

(2) アナニヤは、幻の中で主からの語りかけを受けた。

①主は「アナニヤよ」と彼の名を呼ばれた。

＊私たちの名は、神に知られている。

②アナニヤは、「主よ。ここにおります」と答えた。

＊ヘブル語で「ヒネニ」である。

＊創22：1でのアブラハムの応答

＊イザ6：8でのイザヤの応答

2. 11～12 節

Act 9:11 すると主はこう言われた。「立って、『まっすぐ』という街路に行き、サウロというタルソ人をユダの家に尋ねなさい。そこで、彼は祈っています。

Act 9:12 彼は、アナニヤという者が入って来て、自分の上に手を置くと、目が再び見えるようになるのを、幻で見たのです。」

(1) サウロは、ユダという人の家に滞在していた。

①彼の家は、「まっすぐ」という街路に面していた。

＊「直線通り」（新共同訳）

＊ダマスコの町を東西に平行に走る2本のメインストリートのひとつ

＊今日でもこの通りは残っている。

②このユダに関しては何も情報がない。裕福で著名なユダヤ人であろう。

③サウロは、ダマスコではこの人の家に滞在するつもりでいたのであろう。

(2) アナニヤは、サウロというタルソ人をユダの家に尋ねるように命じられた。

①サウロには、すでに幻が与えられていた。

②アナニヤという人がやって来て自分に手を置くと、目が再び見えるようになる。

③サウロは、アナニヤという人が尋ねて来るのを待っていた。

3. 13～14 節

Act 9:13 しかし、アナニヤはこう答えた。「主よ。私は多くの人々から、この人がエルサレムで、あなたの聖徒たちにどんなにひどいことをしたかを聞きました。

Act 9:14 彼はここでも、あなたの御名を呼ぶ者たちをみな捕縛する権限を、祭司長たちから授けられているのです。」

(1) 「私は多くの人々から、この人がエルサレムで、あなたの聖徒たちにどんなにひ

「どいことをしたかを聞きました」

- ①サウロの悪名は、ダマスコにまで届いていた。
- ②あなたの聖徒たちに酷いことをした。
 - *ここで初めて、信者は「聖徒」と呼ばれている。
 - *「聖徒」とは、「選び分けられた者」という意味である。
 - *ロマ1:1、エペ1:1、ピリ1:1
- ③なぜそんな悪人を癒す必要があるのか。

(2)「彼はここでも、あなたの御名を呼ぶ者たちをみな捕縛する権限を、祭司長たちから授けられているのです」

- ①サウロは、キリストを信じる者たちを捕縛するためにダマスコに来た。
- ②もし盲目が癒されたなら、再び信者を迫害する可能性がある。

4. 15～16 節

Act 9:15 しかし、主はこう言われた。「行きなさい。あの人はわたしの名を、異邦人、王たち、イスラエルの子孫の前に運ぶ、わたしの選びの器です。」

Act 9:16 彼がわたしの名のために、どんなに苦しまなければならないかを、わたしは彼に示すつもりです。」

- (1) 主は、サウロの使命を明確に啓示された。
 - ①彼は、神の選びの器である。
 - ②彼は、3種類の人たちに福音（イエス）を伝える。
 - *異邦人
 - *王たち（総督フェリクス、アグリッパ2世、カイザル）
 - *同胞のイスラエル人

- (2) さらに、サウロの奉仕には苦難が伴うことを啓示された。
 - ①聖徒たちに深い苦しみを与えた者が、より深い苦しみを体験するようになる。
 - ②2 コリ 11:23b～27

2Co 11:23b 私の労苦は彼らよりも多く、牢に入れられたことも多く、また、むち打たれたことは数えきれず、死に直面したこともしばしばでした。

2Co 11:24 ユダヤ人から三十九のむちを受けたことが五度、

2Co 11:25 むちで打たれたことが三度、石で打たれたことが一度、難船したことが三度あり、一昼夜、海上を漂ったこともあります。

2Co 11:26 幾度も旅をし、川の難、盗賊の難、同国民から受ける難、異邦人から受ける難、都市の難、荒野の難、海上の難、にせ兄弟の難に会い、

2Co 11:27 勞し苦しみ、たびたび眠られぬ夜を過ごし、飢え渴き、しばしば食べ物もなく、寒さに凍え、裸でいたこともありました。

II. アナニヤの従順な行動（17～19 節 a）

1. 17 節

Act 9:17 そこでアナニヤは出かけて行って、その家に入り、サウロの上に手を置いてこう言った。「兄弟サウロ。あなたの来る途中、あなたに現れた主イエスが、私を遣わされました。あなたが再び見えるようになり、聖霊に満たされるためです。」

(1) アナニヤは、多少の疑念を抱きながらも、ユダの家を訪問した。

①彼は、サウロを「兄弟」として受け入れた。

＊サウロにとっては、大いなる慰めである。

(2) アナニヤは、来訪の目的を告げた。

①主イエスが私を遣わされた。

②あなたが再び見えるようになるため。

③あなたが聖霊に満たされるため。

＊ここでの聖霊の満たしは、伝道のための力（聖霊の支配）である。

＊聖霊のバプテスマは、復活のイエスに出会った時に受けていた。

2. 18～19 節 a

Act 9:18 するとただちに、サウロの目からうろこのような物が落ちて、目が見えるようになった。彼は立ち上がって、バプテスマを受け、

Act 9:19a 食事をして元気づいた。

(1) アナニヤの按手によって、サウロはただちに癒された。

①目からうろこのような物が落ちた。

②目が見えるようになった。

(2) サウロは、水のバプテスマを受けた。

①イエス・キリストと一体化したことを象徴する水のバプテスマである。

(3) 3 日間の断食を終えた。

①サウロは、食事をして元気を回復した。

(4) その後のアナニヤの奉仕に関しては、情報がない。

- ①彼は、使徒の働きの記録から消えた。
- ②使 22：1～30 の証言の中で、パウロはアナニヤに言及している。
- ③使徒の働きは、万人祭司を前提とした物語である。

Ⅲ. サウロのダマスコでの伝道（19b～21 節）

1. 19b～20 節

Act 9:19b サウロは数日の間、ダマスコの弟子たちとともにいた。

Act 9:20 そしてただちに、諸会堂で、イエスは神の子であると宣べ伝え始めた。

- (1) サウロは、ある時点で、ユダの家から弟子たちの中の誰かの家に移った。

- ①彼は、「数日の間」ダマスコの弟子たちとともにいた。

- (2) サウロは、時間を無駄にしないで、ただちに伝道を開始した。

- ①ダマスコには多くの会堂があった。

- ②今サウロは、当初の目的とは正反対の目的で諸会堂を訪問している。

- *大祭司カヤパの命令にではなく、天の大祭司の命令に従っている。

- (3) 彼は、「イエスは神の子であると宣べ伝え始めた」。

- ①ヘブル語聖書を用いてイエスは神の子であることを論証することができた。

- ②パウロにとっては、組織神学の変更ではなく、組織神学の完成である。

- *「イエスは神の子である」という真理は、パズルの最後のピースである。

2. 21 節

Act 9:21 これを聞いた人々はみな、驚いてこう言った。「この人はエルサレムで、この御名を呼ぶ者たちを滅ぼした者ではありませんか。ここへやって来たのも、彼らを縛って、祭司長たちのところへ引いて行くためではないのですか。」

- (1) サウロのメッセージを聞いたダマスコのユダヤ人たちは、仰天した。

- ①サウロは、イエスを信じる者たちを縛り上げるためにダマスコに来た。

- ②その者が、今やイエスを宣べ伝える者になった。

- (2) 彼がダマスコにどれくらいの期間滞在したかは、分らない。

- ①次にサウロは、アラビヤに出て行く。

- ②ガラ 1：16～17

Gal 1:16 異邦人の間に御子を宣べ伝えさせるために、御子を私のうちに啓示することをよしとされたとき、私はすぐに、人には相談せず、

Gal 1:17 先輩の使徒たちに会うためにエルサレムにも上らず、アラビヤに出て行き、またダマスコに戻りました。

③その後彼は、再びダマスコに戻っている。

④使9:21と22の間に、彼はアラビヤに行ったのであろう。

結論：サウロの宣教の本質

1. 神学的土台

- (1) サウロの内に起こったことは、組織神学の再構築ではなく完成である。
- (2) 彼は、イエス・キリストの福音の内容をすでに知っていた。
 - ①逮捕した「この道の者」たちの証言を聞いていた。
 - ②ステパノの弁明を聞いていた。
 - ③復活のイエスに出会うまでは、それらの知識が彼の内で受肉しなかった。
- (3) これまでの学びは、イエスが神の子であるという真理によって完成した。
 - ①パウロは、時間をかけて福音の真理を発見したのではない。
 - ②彼の神学は、回心した直後からほとんど完成していた。
 - ③ヘブル語聖書を用いてイエスは神の子であることを論証することができた。
- (4) サウロは、ステパノが落としたバトンを拾って走り始めた。

2. 宣教の対象

- (1) サウロは異邦人のための使徒であるが、宣教の対象は異邦人だけではなかった。
- (2) ロマ1:16の原則

Rom 1:16 私は福音を恥とは思いません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。

①サウロの宣教の戦略

* 先ずユダヤ人に、次に異邦人に

- ②会堂を訪問して、ユダヤ人に福音を伝える。
- ③そこには、神を恐れる異邦人と門の異邦人がいて、彼らも耳を傾ける。

3. メッセージの内容

- (1) サウロのメッセージの焦点は、「イエスは神の子である」というものであった。
- (2) 「神の子」という言葉の使用法
 - ①イスラエルの民（ホセ11:1）
 - ②イスラエルの王（2サム7:14）

2Sa 7:14 わたしは彼にとって父となり、彼はわたしにとって子となる。もし彼が罪を犯すと

きは、わたしは人の杖、人の子のむちをもって彼を懲らしめる。

③メシア（詩2：7）

Psa 2:7 「わたしは【主】の定めについて語ろう。／主はわたしに言われた。／『あなたは、わたしの子。／きょう、わたしがあなたを生んだ。

(3) 「子 (son)」の聖書的意味

①信仰や性質を表すものである。

②バルナバ（慰めの子）

③ヤコブとヨハネはボアネルゲ（雷の子）

④クリスチャンは「アブラハムの子孫」（ガラ3：7）

(4) イエスが自らを「神の子」と主張したとき、イエスは自らの神性を主張している
のである。

(5) サウロは、イエスは神であると主張した。

①使9：22

Act 9:22 しかしサウロはますます力を増し、イエスがキリストであることを証明して、ダマスコに住むユダヤ人たちをうろたえさせた。

②イエス＝神の子＝キリスト＝神

「その後のサウロ」

使徒 9：22～31

1. はじめに

(1) ダマスコ途上で復活のイエスに出会ったサウロは、盲目になった。

①サウロを窮地から救う役割は、アナニヤという弟子に与えられた。

②神は、普通の人を用いて御業を行われる。

(2) 目が開かれたサウロは、伝道を開始した。

①使 9：20～21

Act 9:20 そしてただちに、諸会堂で、イエスは神の子であると宣べ伝え始めた。

Act 9:21 これを聞いた人々はみな、驚いてこう言った。「この人はエルサレムで、この御名を呼ぶ者たちを滅ぼした者ではありませんか。ここへやって来たのも、彼らを縛って、祭司長たちのところへ引いて行くためではないのですか。」

②使 9：22

Act 9:22 しかしサウロはますます力を増し、イエスがキリストであることを証明して、ダマスコに住むユダヤ人たちをうろたえさせた。

(3) 使 9：21 と 22 の間に、アラビヤ滞在の期間が入る。

①イエスに出会ってから、エルサレムに上るまでの期間は、およそ 3 年間。

②3 年間のパウロの地理的動き

*ダマスコの会堂での伝道

*アラビヤ滞在

*ダマスコへの帰還と逃避

*エルサレム訪問

*タルソへの帰還

2. アウトライン

(1) アラビヤ滞在

(2) ダマスコへの帰還と逃避 (22～25 節)

(3) エルサレム訪問 (26～28 節)

(4) タルソへの帰還 (29～30 節)

(5) 教会成長の報告 (31 節)

結論：サウロの福音理解

その後のサウロについて学ぶ。

I. アラビヤ滞在

1. ガラ1:17

Gal 1:17 先輩の使徒たちに会うためにエルサレムにも上らず、アラビヤに出て行き、またダマスコに戻りました。

(1) サウロは、ダマスコ→アラビヤ→ダマスコと移動した。

①その間、3年弱の時間が経過する。

(2) アラビヤ

①今のサウジアラビアではない。

*従って、荒野で隠遁生活をしていたわけではない。

②当時のアラビヤは、ダマスコから今のヨルダンを通過し死海の南部に至る地域。

③荒野もあるが、ナバテヤ人の町々が点在する地域である。

④サウロは、黙想のためではなく、この地域の町々で伝道した可能性が大である。

⑤彼は、回心の直後から伝道を開始している。神学的に黙想する必要はない。

II. ダマスコへの帰還と逃避 (22～25 節)

1. 22 節

Act 9:22 しかしサウロはますます力を増し、イエスがキリストであることを証明して、ダマスコに住むユダヤ人たちをうろたえさせた。

(1) アラビヤでの伝道を終えたサウロは、ダマスコに戻った。

①彼は、会堂に行き、以前にも増して力強く伝道した。

②彼は、イエスがキリスト（約束のメシア）であることを証明した。

*彼のヘブル語聖書の知識が役立った。

③彼は、ダマスコに住むユダヤ人たちをうろたえさせた。

*「混乱させた」という意味である。

(2) サウロの奉仕は、ステパノの奉仕の継続である。

①ステパノも「イエスはキリストである」というメッセージを語った。

②ステパノ同様、サウロも命を狙われるようになる。

*理屈で勝てないなら、力に訴えろと考える者たちがいた。

2. 23～24 節

Act 9:23 多くの日数がたって後、ユダヤ人たちはサウロを殺す相談をしたが、

Act 9:24 その陰謀はサウロに知られてしまった。彼らはサウロを殺してしまおうと、昼も夜も町の門を全部見張っていた。

(1) サウロ殺害の陰謀が話し合われた。

①2 コリ 11 : 32

2Co 11:32 ダマスコではアレタ王の代官が、私を捕らえようとしてダマスコの町を監視しました。

②ダマスコのユダヤ人たちとアレタ王の代官が、共謀した。

*アレタ王は、ナバテヤ王国の王である。

③サウロ暗殺の陰謀はいくつか起こるが、これが最初のものである。

(2) その陰謀は、サウロに知られてしまった。

①陰謀を企てた者たちは、昼も夜も町の門を全部見張っていた。

*サウロが逃亡しないように。

3. 25 節

Act 9:25 そこで、彼の弟子たちは、夜中に彼をかごに乗せ、町の城壁伝いにつり降ろした。

(1) サウロにはすでに弟子たちがいた。

①ラビ・サウロに従う弟子たちである。

②サウロは、この段階ですでに祝された伝道を展開していた。

(2) 彼の弟子たちは、サウロをかごに乗せて、家の窓から城壁の外につり降ろした。

①エリコの遊女ラハブの信仰を思い出さる行為である（ヨシ2：15）。

②2人のイスラエル人のスパイを、綱で窓からつり降ろした。

Ⅲ. エルサレム訪問（26～28 節）

1. 26 節

Act 9:26 サウロはエルサレムに着いて、弟子たちの仲間に入ろうと試みたが、みなは彼を弟子だとは信じないで、恐れていた。

(1) 3年ぶりにエルサレムに戻った理由

①ガラ 1 : 18

Gal 1:18 それから三年後に、私はケパをたずねてエルサレムに上り、彼のもとに十五日間滞在しました。

- ②使徒たちとの交流を望んだ。
- ③彼らから、主イエスに関する情報を得たいと思った。
- ④エルサレム教会との和解を求めた。
- ⑤次の宣教をエルサレムから開始したいと思った。

(2) エルサレム教会の信徒たちは、3年経っても、サウロを疑っていた。

- ①彼らは、サウロを恐れていた。
- ②かつてのユダヤ人仲間にとっても、サウロは裏切り者であった。

2. 27～28 節

Act 9:27 ところが、バルナバは彼を引き受けて、使徒たちのところへ連れて行き、彼がダマスコへ行く途中で主を見た様子や、主が彼に向かって語られたこと、また彼がダマスコでイエスの御名を大胆に宣べた様子などを彼らに説明した。

Act 9:28 それからサウロは、エルサレムで弟子たちとともにいて自由に出は入りし、主の御名によって大胆に語った。

(1) バルナバの奉仕

- ①バルナバは、サウロをペテロとヤコブに紹介した。
 - *このヤコブは、イエスの肉の弟である。
 - *エルサレム教会の初代監督である。
- ②バルナバの説明
 - *サウロがダマスコ途上で主イエスに出会った様子
 - *主イエスが彼を使徒として任命したこと
 - *ダマスコでイエスの御名を大胆に宣べ伝えた様子

(2) バルナバの奉仕の結果

- ①サウロは、ペテロの家に15日間滞在した（ガラ1:18）。
- ②エルサレム教会の信者たちと自由な交わりを楽しんだ
- ③ヘレニストの会堂に行き、主の御名によって大胆に語った。

IV. タルソへの帰還（29～30 節）

1. 29 節

Act 9:29 そして、ギリシヤ語を使うユダヤ人たちと語ったり、論じたりしていた。しかし、彼らはサウロを殺そうとねらっていた。

(1) サウロは、ヘレニストのユダヤ人たちと神学論争を繰り広げた。

①これは、ステパノの奉仕の継承である。

(2) ステパノ同様、サウロも暗殺されそうになった。

①3 年前の悲劇の再来である。

②これは、サウロに対する 2 度目の陰謀である。

2. 30 節

Act 9:30 兄弟たちはそれと知って、彼をカイザリヤに連れて下り、タルソへ送り出した。

(1) この陰謀の噂は、信者たちの耳に届いた。

①そこで彼らは、サウロを救出することにした。

②サウロも主イエスからの語りかけを受けた。

③使 22 : 17～18

Act 22:17 こうして私がエルサレムに帰り、宮で祈っていると、夢ごちになり、

Act 22:18 主を見たのです。主は言われました。『急いで、早くエルサレムを離れなさい。人々がわたしについてのあなたのあかしを受け入れないからです。』

④使 22 : 21

Act 22:21 すると、主は私に、『行きなさい。わたしはあなたを遠く、異邦人に遣わす』と言われました。」

(2) 一番安全な場所は、タルソである。

①カイザリヤ→タルソへの移動

②キリキヤ州の州都、サウロの出身地

③海路でも陸路でも、東西交易の要衝の地

④ここが、次の数年間（5～7 年）、サウロの伝道の本拠地となる。

V. 教会成長の報告（31 節）

1. 31 節

Act 9:31 こうして教会は、ユダヤ、ガリラヤ、サマリヤの全地にわたり築き上げられて平安を保ち、主を恐れかしこみ、聖霊に励まされて前進し続けたので、信者の数がふえて行った。

(1) 教会成長の報告の 3 回目（合計 7 回出て来る）

①使 2 : 47、6 : 7、9 : 31

②ガリラヤが初めて登場する。

③福音は、文字通りユダヤとサマリヤに届けられた。

(2) ステパノの殉教から始まった迫害は、サウロのエルサレム脱出を機に一段落した。

- ①教会は、平安を保った。
- ②主への恐れと聖霊による励ましがあつた。
- ③その結果、信者の数がふえて行つた。

結論：サウロの福音理解

1. サウロの福音理解は、使徒たちのそれを同じであつた。

(1) ガラ 2：6～7

Ga1 2:6 そして、おもだつた者で見られていた人たちからは、——彼らがどれほどの人たちであるにしても、私には問題ではありません。神は人を分け隔てなさいません——そのおもだつた人たちは、私に対して、何もつけ加えることをしませんでした。

Ga1 2:7 それどころか、ペテロが割礼を受けた者への福音をゆだねられているように、私が割礼を受けない者への福音をゆだねられていることを理解してくれました。

(2) 同じ御霊が、同じ福音を使徒たちに啓示された。

2. サウロは、組織神学を再構築する必要はなかつた。

(1) 主イエスに出会った直後から、彼は伝道活動を開始している。

(2) サウロには、堅固な神学的土台があつた。

- ①5歳からヘブル語聖書を学んでいる。
 - ②ヘブル語聖書の神学を知り尽くしている。
 - ③ガマリエルの弟子としてラビ的ユダヤ教をマスターしている。
 - ④彼は、紀元1世紀最大のラビのひとりである。
- (3) 主イエスとの出会いは、サウロの神学的理解を完成させた。
- ①主イエスは、大きなパズルの最後のピースであつた。
 - ②イエスを約束のメシアと受け入れたとき、ヘブル語聖書のすべてがつながつた。

3. 神は、今日のサウロを起しておられる。

(1) メシアニックジューの救いの証しは、そのことを証言している。

(2) 日本人の救いの証しはどうか。

- ①仏教徒の救い
- ②カルト宗教からの救い
- ③無神論からの救い

「ペテロの奉仕」

使徒 9 : 32～43

1. はじめに

(1) サウロの物語は、一次中断する。

①ここから、ペテロの奉仕の記録に入っていく。

②この記録は、異邦人の使徒サウロが活躍する舞台を用意するためのものである。

③前回ペテロが登場したのは、使 8 : 25 である。

Act 8:25 このようにして、使徒たちはおごそかにあかしをし、また主のことばを語って後、エルサレムへの帰途につき、サマリヤ人の多くの村でも福音を宣べ伝えた。

(2) ペテロの巡回伝道

①サウロがエルサレムを出てタルソに移住して以降、平和な時期が数年間続いた。

②その状態が、使 9 : 31 で描かれている。

Act 9:31 こうして教会は、ユダヤ、ガリラヤ、サマリヤの全地にわたり築き上げられて平安を保ち、主を恐れかしこみ、聖霊に励まされて前進し続けたので、信者の数がふえて行った。

③その間、ペテロは巡回伝道を行った。

*ユダヤ、ガリラヤ、サマリヤの町々を巡り、教会を建て上げていった。

2. アウトライン

(1) ペテロの巡回伝道 (32 節 a)

(2) ルダでの奉仕 (32 b ～35 節)

(3) ヨッパでの奉仕 (36～43 節)

結論

(1) 使徒職の証明としての「しるし」

(2) 皮なめしのシモンの家に滞在することの意味

ペテロの奉仕について学ぶ。

I. ペテロの巡回伝道 (32 節 a)

1. 32 節 a

Act 9:32a さて、ペテロはあらゆる所を巡回したが、

(1) 平和な時期に、ペテロは各地を巡りながら巡回伝道を行った。

①これは、あくまでもユダヤ人伝道であった。

②ルカは、2つの町でのペテロの奉仕について記録している。

＊奉仕の内容は、主イエスの奉仕を思い出させるものである。

＊ペテロの奉仕とパウロの奉仕との間に類似性がある。

(2) この出来事以降も、ペテロは広範囲にわたり巡回伝道を行った。

①1 コリ 9 : 5

1Co 9:5 私たちには、ほかの使徒、主の兄弟たち、ケパなどと違って、信者である妻を連れて歩く権利がないのでしょうか。

②1 ペテ 1 : 1

1Pe 1:1 イエス・キリストの使徒ペテロから、ポント、ガラテヤ、カパドキヤ、アジヤ、ビテニヤに散って寄留している、選ばれた人々、すなわち、

(3) ここで取り上げる地区での伝道は、ピリポが先駆者である。

①使 8 : 40

Act 8:40 それからピリポはアゾトに現れ、すべての町々を通して福音を宣べ伝え、カイザリヤに行った。

②ルカは、ペテロの奉仕の場として、2つの町を特記する。

＊ルダとヨッパにおいて大いなるしるしが行われた。

＊そのしるしは、主イエスの働きを思い出させるものである。

Ⅱ. ルダでの奉仕 (32 b ~ 35 節)

1. 32b

Act 9:32b **ルダに住む聖徒たちのところへも下って行った。**

(1) ルダという町

①ヘブル語聖書では、ロデ（ロッド）という名で知られていた。

＊1 歴 8 : 12

1Ch 8:12 エルパアルの子は、エベル、ミシュアム、シェメデ、——彼はオノとロデおよびそれに属する村落を建てた——

②エルサレムの北西 40 キロのところにある町である。

＊エルサレムから地中海に至る道の 3 分の 2 くらいのところに位置する。

＊シャロン平原の南端に位置する町であった。

③多くの異邦人が住んでいたが、それでもここは重要なユダヤ人の町であった。

(2) ルダにはユダヤ人信者の群れがあった。

①恐らく、ピリポの伝道の実であろう。

②使 8 : 40

Act 8:40 それからピリポはアゾトに現れ、すべての町々を通して福音を宣べ伝え、カイザリヤに行った。

(3) ロッド空港乱射事件

①1972 年 5 月 30 日、「日本赤軍」によるテロ事件が起こった。

②英語では、「Lod Airport massacre（ロッド空港での虐殺）」と呼ばれる。

③26 人が殺害され、73 人が重軽傷を負った。

④実行犯

＊幹部の奥平剛士（おくだいら・つよし）

＊京都大学の学生だった安田安之

＊鹿児島大学の学生だった岡本公三

⑤現在のベングリオン国際空港は、新空港である。

2. 33 節

Act 9:33 彼はそこで、八年の間も床に着いているアイネヤという人に出会った。彼は中風であつた。

(1) ペテロは、アイネヤという人に出会った。

①中風で 8 年間も床に着いていた。

②主イエスの奉仕の中に似たような事例があつた。

(2) カペナウムでの出来事

①中風の人が 4 人の人に担がれて屋根から降ろされた。

②マタ 9 : 5~6

Mat 9:5 『あなたの罪は赦された』と言うのと、『起きて歩け』と言うのと、どちらがやさしいか。

Mat 9:6 人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを、あなたがたに知らせるために。」こう言って、それから中風の人に、「起きなさい。寝床をたたんで、家に帰りなさい」と言われた。

(3) ベテスダの池での出来事

①38 年もの間、病気にかかっている人がいた。

②ヨハ 5 : 8

Joh 5:8 イエスは彼に言われた。「起きて、床を取り上げて歩きなさい。」

3. 34 節

Act 9:34 ペテロは彼にこう言った。「アイネヤ。イエス・キリストがあなたをいやしてくださるのです。立ち上がりなさい。そして自分で床を整えなさい。」すると彼はただちに立ち上がった。

(1) ペテロは、アイネヤに命じた。

①癒しの言葉の比較

* 「起きなさい。寝床をたたんで、家に帰りなさい」(イエス)

* 「起きて、床を取り上げて歩きなさい」(イエス)

* 「立ち上がりなさい。そして自分で床を整えなさい」(ペテロ)

②ペテロは、イエス・キリストが癒し主であることを明確に宣言している。

* 「アイネヤ。イエス・キリストがあなたをいやしてくださるのです」

③ペテロの使徒としての権威は、証明された。

* 「すると彼はただちに立ち上がった」

4. 35 節

Act 9:35 ルダとサロンに住む人々はみな、アイネヤを見て、主に立ち返った。

(1) このしるしは、ルダとシャロンに住む多くの人々を信仰に導いた。

①「主に立ち返った」とは、主を信じて救われたという意味である。

②使 11 : 21、15 : 19

Ⅲ. ヨッパでの奉仕 (36～43 節)

1. 36 節

Act 9:36 ヨッパにタビタ(ギリシヤ語に訳せば、ドルカス)という女の弟子がいた。この女は、多くの良いわざと施しをしていた。

(1) ヨッパという町

①ヘブル語でヤフォ

②現在は、テル・アビブと隣接している。

③ルダから約 18 キロ北西に位置する町である。

④ヨッパの聖徒たちは、ペテロがルダにいると聞いて、彼を呼び寄せる。

(2) タビタという女性の信者

①ギリシヤ語でドルカス(カモシカという意味)という名で知られていた。

* 異邦人が多い地域である。

②彼女は、善行と施しで有名であった。

2. 37～38 節

Act 9:37 ところが、そのころ彼女は病気になって死に、人々はその遺体を洗って、屋上の間に置いた。

Act 9:38 ルダはヨッパに近かったので、弟子たちは、ペテロがそこにいると聞いて、人をふたり彼のところへ送って、「すぐに来てください」と頼んだ。

(1) 彼女は死に、埋葬の準備が整った。

①人々は、その遺体を洗った。

②それを屋上の間に置いた。

(2) 信者の群れは、ペテロがルダにいると聞いて、2 人の使者を派遣した。

①エルサレム以外の場所では、遺体は最長 3 日 3 晩置いておくことが許された。

②ペテロを迎えにルダに行くのに半日、ヨッパに戻るのに半日かかった。

③ペテロは、時間内にヨッパに着く必要があった。

＊「すぐに来てください」

3. 39 節

Act 9:39 そこでペテロは立って、いっしょに出かけた。ペテロが到着すると、彼らは屋上の間に案内した。やもめたちはみな泣きながら、彼のそばに来て、ドルカスがいっしょにいたころ作ってくれた下着や上着の数々を見せるのであった。

(1) ヨッパに到着したペテロは、屋上の間に案内された。

①そこには、弔問客が多数集まっていた。

②特に、ドルカスから良くしてもらっていたやもめたちがいて、泣いていた。

③彼女たちは、ドルカスが作ってくれた下着や上着の数々を見せた。

④もし生き返ることが可能なら、ドルカスこそ相応しいと訴えているのである。

(2) 主イエスの奉仕にも似たような事例があった。

①ヤイロの娘の癒し

②マコ 5 : 40～41

Mar 5:40 人々はイエスをあざ笑った。しかし、イエスはみんなを外に出し、ただその子どもの父と母、それにご自分の供の者たちだけを伴って、子どものいる所へ入って行かれた。

Mar 5:41 そして、その子どもの手を取って、「タリタ、クミ」と言われた。（訳して言えば、「少女よ。あなたに言う。起きなさい」という意味である。）

4. 40～41 節

Act 9:40 ペテロはみなのを外に出し、ひざまずいて祈った。そしてその遺体のほうを向いて、「タビタ。起きなさい」と言った。すると彼女は目をあけ、ペテロを見て起き上がった。

Act 9:41 そこで、ペテロは手を貸して彼女を立たせた。そして聖徒たちとやもめたちとを呼んで、生きている彼女を見せた。

(1) ペテロは、主イエスを見習っている。

①人々を部屋の外に出した。

②死体に命じた。

*「タリタ、クミ」（イエス）

*「タビタ、クミ」（ペテロ）

(2) ペテロは、彼女が生き返るまで、彼女に触れていない。

①儀式的汚れを避けるためである。

5. 42 節

Act 9:42 このことがヨッパ中に知れ渡り、多くの人々が主を信じた。

(1) ペテロは、数々のしるしを行っただが、死者をよみがえらせたのは初めてである。

①このしるしは、ヨッパの人々が信仰に入る原動力となった。

②「主を信じた」と「主に立ち返った」は、同じ意味である。

6. 43 節

Act 9:43 そして、ペテロはしばらくの間、ヨッパで、皮なめしのシモンという人の家に泊まっていた。

(1) ペテロはしばらくの間、皮なめしのシモンの家に滞在した。

①これは、次の奉仕にペテロを導くための神の方法であった。

結論

1. 使徒職の証明としての「しるし」

(1) 紀元 1 世紀の教会では、「しるし」は使徒たちとその同労者たちだけが行った。

①ヨッパの聖徒たちには、その権威が与えられていなかった。

②彼らに信仰がなかったわけではない。

③ペテロを呼んだのは、彼らの信仰表現である。

④この時まで、死者が生き返ったという事例はなかった。

⑤彼らは、もしそれが可能だとしたら、使徒に来てもらう必要があると思った。

(2) 奇跡や「しるし」を行う能力は、真の使徒であることの証明である。

①2 コリ 12:12

2Co 12:12 使徒としてのしるしは、忍耐を尽くしてあなたがたの間で行われた、しるしと不思議と力あるわざです。

(3) 使徒の使命は、普遍的教会の建て上げである。

①エペ 4:11~13

Eph 4:11 こうして、キリストご自身が、ある人を使徒、ある人を預言者、ある人を伝道者、ある人を牧師また教師として、お立てになったのです。

Eph 4:12 それは、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためであり、

Eph 4:13 ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身たけにまで達するためです。

2. 皮なめしのシモンの家に滞在することの意味

(1) 宗教的なユダヤ人なら、皮なめしの家に滞在することはない。

①レビ 11:40

Lev 11:40 その死体のいくらかでも食べる者は、その衣服を洗わなければならない。その人は夕方まで汚れる。また、その死体を運ぶ者も、その衣服を洗わなければならない。その人は夕方まで汚れる。

②皮なめしは、汚れた職業と見なされた。

*娼婦、糞尿収集、賭け事、ロバ使いなどと同等と見なされた。

③町の境界線から、少なくとも25ヤード(22.5メートル)離れて住む。

*悪臭が漂った。

(2) ペテロが皮なめしのシモンの家にしばらく滞在したことには、意味がある。

①彼の信仰は、ユダヤ教の厳格な戒律から解放されつつある。

*ペテロは、汚れた食事をすでに食べていたのである。

②ルダとヨッパは、異邦人人口の多い地域である。

③異邦人を受け入れるための準備が神によって為されている。

「コルネリオが見た幻」

使徒 10 : 1～8

1. はじめに

(1) ペテロの巡回伝道

①ペテロは、ユダヤ、ガリラヤ、サマリヤの町々を巡り、教会を建て上げた。

②ルダでの奉仕

*8 年間床に着いていたアイネヤが、中風から癒された。

③ヨッパでの奉仕

*タビタ（ギリシア語ではドルカス）が死んだ。

*ヨッパの弟子たちは、ペテロを呼びに使いを送った。

*タビタは、死からよみがえった。

*ペテロは、ヨッパの皮なめしのシモンの家に滞在した。

(2) 物語は、2 つの幻に移行していく。

①コルネリオが見た幻とペテロが見た幻

2. アウトライン

(1) コルネリオの紹介（1～2 節）

(2) コルネリオが見た幻（3～6 節）

(3) コルネリオの応答（7～8 節）

結論

(1) コルネリオの信仰

(2) 聖書に登場する百人隊長たち

(3) 天使の役割と人間の役割

コルネリオが見た幻について学ぶ。

I. コルネリオの紹介（1～2 節）

1. 1 節

Act 10:1 さて、カイザリヤにコルネリオという人がいて、イタリア隊という部隊の百人隊長であった。

(1) カイザリヤ

①ヨッパから約 50 キロ北に位置する港町である。

②カイザリヤは、ユダヤにおけるローマ総督の滞在地であった。

*ユダヤを統治するためのローマ帝国の首都

③元はストラトの塔 (Strato's Tower) と呼ばれていた。

④ヘロデ大王がこの町を拡大し、ギリシア・ローマ風の都市に造り替えた。

*ヘロデは、前 25～13 年に、人工の港を備えた巨大な都市を建設した。

*その結果、カイザリヤはローマ帝国のどこにでも行ける港町となった。

⑤さらにヘロデは、20 キロメートル以上に及ぶ導水橋を建設した。

*カルメル山系から水を運んだ。

⑥紀元 41～44 年、ヘロデ・アグリッパ 1 世は、自分の軍隊を駐留させていた。

*コルネリオが見たのは、紀元 41 年以前である。

⑦カイザリヤは異邦人の町であったが、ユダヤ人も多く住んでいた。

*紀元 66 年、1 日で 2 万人のユダヤ人たちが殺された。

*第 1 次ユダヤ戦争へとつながって行く。紀元 70 年にエルサレムが崩壊。

(2) 百人隊長コルネリオ

①兵士から昇進し、百人隊長になる。

*通常は、15 年以上の実績が必要であった。

*一般の兵士の 15 倍の給料をもらっていたと言われている。

*好戦的でなく、冷静な判断ができる。攻撃された場合、断固戦う。

②ローマ軍の組織

*百人隊長は兵士 100 人の指揮官である (80 人の場合もあった)。

*cohort (歩兵隊の一隊) : 100 人×6=600 人 (6 人の百人隊長)

・カイザリヤには、5 隊が駐屯 (3000 人の兵士、30 人の百人隊長)。

・エルサレムには、1 隊が駐屯 (600 人の兵士、6 人の百人隊長)

・ヨハ 18 : 3

Joh 18:3 そこで、ユダは一隊の兵士と、祭司長、パリサイ人たちから送られた役人たちを引き連れて、ともしびとたいまつと武器を持って、そこに来た。

*legion (レギオン、軍団) : 600 人×10=6,000 人 (60 人の百人隊長)

③コルネリオは、イタリア隊の百人隊長であった。

*600 人から成る一隊全員が、イタリア出身。

*イタリア隊には、百人隊長が 6 人いた。

④兵士の勤務は、通常 17 歳～37 歳の 20 年間。

*給料は良いが、20 年間で生き延びるのは、約半数。

2. 2 節

Act 10:2 彼は敬虔な人で、全家族とともに神を恐れかしこみ、ユダヤの人々に多くの施しを

なし、いつも神に祈りをしていたが、

(1) コルネリオの特徴

①敬虔な人

②神を恐れかしこむ人

＊改宗者ではない。

＊割礼は受けないが、ユダヤ人の神を礼拝している人である。

＊彼は、「神を恐れる異邦人」である。

・ユダヤ教の会堂で礼拝していた。

＊全家族が、同じ信仰を持っていた。

・兵役に就いている者は結婚が許されなかった。

・コルネリオが結婚していたかどうかは不明である。

・家族とは、奴隷まで含めた概念である（household）。

③ユダヤ人に対して多くの施しをしていた。

＊内的敬虔の外的表現である。

＊彼は、アブラハムの子孫に愛を示していた。

＊彼は、施しの習慣をユダヤ人から学んだのであろう。

＊今日でも、ユダヤ人ほど施しをする民族はいない。

＊什一献金は、モーセの律法の一部である。

・恵みの時代である今は、喜んで捧げる時代である。

・旧約時代は、3 種類の什一があったことを知らねばならない。

④いつも神に祈っていた。

＊神に依存して生活していた。

Ⅱ. コルネリオが見た幻（3～6 節）

1. 3 節

Act 10:3 ある日の午後三時ごろ、幻の中で、はっきりと神の御使いを見た。御使いは彼のところに来て、「コルネリオ」と呼んだ。

(1) 午後 3 時（第 9 時）は、ユダヤ教の祈りの時間である。

①午前 9 時と午後 3 時は、神殿でいけにえを捧げる時間。

②この時間に、コルネリオは祈っていた。

(2) コルネリオは、神からのメッセージを携えて来た天使を見た。

①「輝いた衣を着た人が、私の前に立って、」（使 10：30）

②ぼやけた天使像ではなく、はっきりと（鮮明に）見た。

③天使は、「コルネリオ」と彼の名を呼んだ。

2. 4 節

Act 10:4 彼は、御使いを見つめていると、恐ろしくなって、「主よ。何でしょうか」と答えた。すると御使いはこう言った。「あなたの祈りと施しは神の前に立ち上って、覚えられています。」

(1) 歴戦の強者であるコルネリオが、恐ろしくなった。

①神に対する畏怖の念であろう。

＊自分の前に立っているのが神から遣わされた天使であることを理解した。

②彼は、「主よ。何でしょうか」と答えた。

＊「主よ、なんですか」（口語訳）

＊「主よ」（キュリエ）は、「ご主人さま」（英語の sir）であろう。

＊謙遜な応答の言葉である。

(2) 天使の答え

①コルネリオの祈りと施しは、本物である。

②それゆえ、神に覚えられている。

③マタ 26 : 13

Mat 26:13 まことに、あなたがたに告げます。世界中のどこでも、この福音が宣べ伝えられる所なら、この人のした事も語られて、この人の記念となるでしょう。」

3. 5～6 節

Act 10:5 さあ今、ヨッパに人をやって、シモンという人を招きなさい。彼の名はペテロとも呼ばれています。

Act 10:6 この人は皮なめしのシモンという人の家に泊まっていますが、その家は海べにあります。」

(1) 天使の命令

①ヨッパに使者を送る。

②シモンという人を招く。

＊彼の名はペテロとも呼ばれている。

＊これは、皮なめしのシモンと区別するための情報である。

③この人は、皮なめしのシモンという人の家に泊まっている。

＊その家は海べにある。町の外にあるという意味である。

Ⅲ. コルネリオの応答（7～8 節）

1. 7～8 節

Act 10:7 御使いが彼にこう語って立ち去ると、コルネリオはそのしもべたちの中のふたりと、側近の部下の中の敬虔な兵士ひとりと呼び寄せ、

Act 10:8 全部のことを説明してから、彼らをヨッパへ遣わした。

(1) 天使がいなくなると、コルネリオは 3 人の使者をヨッパに派遣した。

①信頼できるしもべ 2 人

②敬虔な兵士 1 人（彼も、神を恐れる異邦人である）

*兵士が 2 人のしもべの護衛に当たる。

(2) コルネリオは、使者に全部のことを説明してから、彼らをヨッパに派遣した。

①コルネリオは、彼らに判断力と動機を与えた。

②コルネリオは、すぐれた指導者であった。

結論

1. コルネリオの信仰

(1) 福音を聞かないで死んだ人はどうなるか。

(2) コルネリオの信仰から、その答を探ろう。

(3) ロマ 1 : 19

Rom 1:19 それゆえ、神について知られることは、彼らに明らかです。それは神が明らかにされたのです。

Rom 1:20 神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです。

(4) ヨハ 1 : 9

Joh 1:9 すべての人を照らすそのまことの光が世に来ようとしていた。

(5) コルネリオには、まだ福音の光が届いていなかった。

(6) しかし、彼は自分に与えられている光に応答していた。

(7) そのような人には、神は福音の光を届けてくださる。

2. 聖書に登場する百人隊長たち

(1) コルネリオは、ユダヤ人を祝福した。

(2) ルカは、福音書の中で 2 人の百人隊長を紹介している。

①ルカ 7 : 2～5

Luk 7:2 ところが、ある百人隊長に重んじられているひとりのしもべが、病気で死にかけて

いた。

Luk 7:3 百人隊長は、イエスのことを聞き、みもとにユダヤ人の長老たちを送って、しもべを助けに来てくださるようお願いした。

Luk 7:4 イエスのもとに来たその人たちは、熱心をお願いして言った。「この人は、あなたにそうしていただく資格のある人です。」

Luk 7:5 この人は、私たちの国民を愛し、私たちのために会堂を建ててくれた人です。」

②ルカ 23 : 47

Luk 23:47 この出来事を見た百人隊長は、神をほめたたえ、「ほんとうに、この人は正しい方であった」と言った。

(3) パウロは2人の百人隊長と出会っている。

①使 22 : 25～26

Act 22:25 彼らがむちを当てるためにパウロを縛ったとき、パウロはそばに立っている百人隊長に言った。「ローマ市民である者を、裁判にもかけずに、むち打ってよいのですか。」

Act 22:26 これを聞いた百人隊長は、千人隊長のところに行って報告し、「どうなされますか。あの人はローマ人です」と言った。

②使 27 : 3

Act 27:3 翌日、シドンに入港した。ユリアスはパウロを親切に取り扱い、友人たちのところへ行って、もてなしを受けることを許した。

3. 天使の役割と人間の役割

(1) 天使は、コルネリオに福音を直接伝えることもできた。

①しかし神は、天使にその役割を与えなかった。

②天使は、神の命令に従って奉仕をしている。

(2) 福音を伝えるのは、ペテロの役割であった。

①キリストはペテロに、天の御国の鍵を与えておられた（マタ 16 : 19）。

②ペテロが、異邦人のために天の御国の扉を開く。

(3) コルネリオとペテロの出会いが、教会の歴史を大きく変えた。

(4) 人生とは邂逅である。

『絶望からの出発』（亀井勝一郎 大和出版）（昭和の文芸批評家）

「もしこのとき、この人（あるいは書物）に会わなかったならば、自分はどうなっていたであろうと思うことがある。そこに生ずるのは謝念である。人生に対する謝念とは邂逅の歓喜である。たとい貧苦病身災難のうちにあろうとも、邂逅の歓喜あるところに人生の幸福があると私は思っている。私はそれ以外の人生の幸福を信じない」

①邂逅とは、偶然の出会いである。

②クリスチャンにとっての邂逅とは、神の摂理による出会いである。

「ペテロが見た幻」

使徒 10 : 9～23a

1. はじめに

(1) 2つの幻が、コルネリオとペテロの出会いを作り出す。

①コルネリオが見た幻

*カイザリヤにいた百人隊長コルネリオは、幻の中で天使の御告げを受けた。

*ヨッパに人を遣って、皮なめしのシモンの家に滞在しているペテロを招け。

*コルネリオは、早速3人の使者をヨッパに遣わした。

②ペテロが見た幻

*これは、これから起こることに対してペテロを準備するための幻である。

*異邦人がユダヤ人を家に招くことはあり得る。

*ユダヤ人がその招きに応答するかどうかは、別問題である。

(ILL) 異邦人に招かれたユダヤ人が、弁当持参でやって来た。

2. アウトライン

(1) 幻のタイミング (9～10 節)

(2) 幻の内容 (11～16 節)

(3) 幻の適用 (17～23 節 a)

結論

(1) 恵みの時代における食物規定

(2) 3度繰り返される教え

(3) ヨナとペテロの比較

ペテロが見た幻について学ぶ。

I. 幻のタイミング (9～10 節)

1. 9 節

Act 10:9 その翌日、この人たちが旅を続けて、町の近くまで来たころ、ペテロは祈りをするために屋上に上った。昼の十二時ごろであった。

(1) 「その翌日」

①コルネリオが幻を見た翌日

②コルネリオの使者たちの旅の2日目

③使者たちは、町の近くまで来た。

④そのタイミングで、ペテロは屋上に上った (外階段)。

(2) 「屋上」

- ①当時のパレスチナの家には、屋上があった。
- ②木の梁を組み、その上に泥と藁を混ぜたものを置いた。
- ③泥が固まると、強固な床となった。
- ④日陰を作ると、食物を保存する場所となった。
- ⑤一人で静まるためには、最適の場所である。

(3) 「昼の 12 時頃」

- ①ユダヤ教の祈りの時間は、午前 9 時と午後 3 時であった。
- ②昼の 12 時は、自発的な祈りの時間であった。
- ③ペテロは、悪臭から逃れ、海風を呼吸しながら祈ろうと思ったのであろう。

2. 10 節

Act 10:10 **すると彼は非常に空腹を覚え、食事をしたくなった。ところが、食事の用意がされている間に、彼はうっとりと夢ごちになった。**

(1) ペテロは、空腹を覚えた。

- ①祈ろうと思っているときに空腹を覚えるのは、誰にでもある経験である。
- ②その時間に、食事の用意がされていた。
 - * 当時は、午後の食事が一番手間をかける食事であった。
 - * その食事の準備がされており、その匂いが漂ってきたのであろう。

(2) 「彼はうっとりと夢ごちになった」

①訳文の比較

「人々が食事の用意をしているうちに、彼は夢心地になった」(新改訳 2017)
「人々が食事の準備をしているうちに、ペテロは我を忘れたようになり」(新共同訳)
「人々が食事の用意をしている間に、夢心地になった」(口語訳)
「人の食を調(ととの)ふるほどに我を忘れし心地して」(文語訳)
「while they made ready, he fell into a trance,」(KJV)

②ギリシア語で「エクスタシス」。

* 直訳すると、「An ecstasy came upon him.」である。

- ③神は、空腹のペテロに、食物を用いて霊的教訓を教えようとされた。

II. 幻の内容 (11～16 節)

1. 11～13 節

Act 10:11 見ると、天が開けており、大きな敷布のような入れ物が、四隅をつるされて地上に降りて来た。

Act 10:12 その中には、地上のあらゆる種類の四つ足の動物や、はうもの、また、空の鳥などがいた。

Act 10:13 そして、彼に、「ペテロ。さあ、ほふって食べなさい」という声が聞こえた。

(1) 巨大な亜麻布の敷布が、四隅をつるされて地上に降りてきた。

①船の帆のような巨大な布である。

②ペテロは、ガリラヤ湖で乗っていた船を思い出したことであろう。

(2) 入れ物の中には、地上のあらゆる種類の動物が入っていた。

①四つ足の動物

②はうもの（は虫類）

③空の鳥

④魚はいなかった。敷布の中では泳げない。

(3) 「ペテロよ、立ち上がり、屠って食べなさい」（新改訳 2017）

①これは、バット・コルである。

*パウロは、ダマスコ途上でバット・コルを聞いた。

*ペテロは、ヨッパでバット・コルを聞いた。

②このバット・コルは、モーセの律法にある食物規定に反する命令を与えた。

③清浄食物（コシエル）（レビ 11 章）

*反芻する四つ足動物で、蹄が分かれ、割れているもの。

*特別な種類の鳥

*それ以外の動物は、不浄食物である。

2. 14～15 節

Act 10:14 しかしペテロは言った。「主よ。それはできません。私はまだ一度も、きよくない物や汚れた物を食べたことはありません。」

Act 10:15 すると、再び声があつて、彼にこう言った。「神がきよめた物を、きよくないと言ってはならない。」

(1) ペテロは、丁寧に、しかし、はっきりと神の命令を拒んだ。

①ペテロは空腹であったが、そこまで空腹ではなかった。

②敬虔なユダヤ人として、ペテロは食物規定を守ってきた。

③敷布の中に入っていたのは、ほとんどが不浄な動物であった。

- ④さらに、清浄な動物であっても、食物規定に従って屠る必要があった。
- ⑤命令を拒んだ理由は、まだ一度も不浄な食物を食べたことがない、であった。

(2) 「神がきよめた物を、きよくないと言ってはならない」

- ①2 度目のバット・コルがあった。
- ②神がきよめた物なのだから、食べてよい。
- ③マコ 7 : 19

Mar 7:19 そのような物は、人の心には、入らないで、腹に入り、そして、かわやに出されてしまうのです。」イエスは、このように、すべての食物をきよいとされた。

＊「イエスは、このように、すべての食物をきよいとされた」という部分は、マルコの福音書だけに出て来る。

＊マルコの福音書の情報源は、ペテロである。

3. 16 節

Act 10:16 こんなことが三回あって後、その入れ物はすぐ天に引き上げられた。

- (1) 同じことが 3 回繰り返された。
- ①しかし、ペテロは自分の意志を曲げなかった。
- ②巨大な敷布は、すぐ天に引き上げられた。

Ⅲ. 幻の適用 (17～23 節 a)

1. 17～18 節

Act 10:17 ペテロが、いま見た幻はいったいどういうことだろう、と思い惑っていると、ちょうどそのとき、コルネリオから遣わされた人たちが、シモンの家をたずね当てて、その門口に立っていた。

Act 10:18 そして、声をかけて、ペテロと呼ばれるシモンという人がここに泊まっているだろうかと尋ねていた。

- (1) ペテロは、幻のことを考え、思案に暮れていた。
- ①幻が示しているのは、食物のことではなく、異邦人のことである。
- ②神は異邦人を清くされた。それゆえ、ユダヤ人と異邦人の関係が回復された。
- ③この議論は、カル・バホメル（大から小へ）の議論である。
- ＊あるいは、小から大の議論である。
- ＊小とは、不浄な動物の清めである。
- ＊大とは、異邦人の清めである。

(2) コルネリオの使者たちの到着により、この幻の適用が明らかになる。

- ①彼らは、シモンの家をたずね当てた。時間がかかったのである。
- ②「ちょうどそのとき」とある。これもまた、神の計画通りであった。
- ③「門口」とは、道路から家の内庭に入るための門の前である。

＊中に入らないのは、ユダヤ人に対する配慮である。

(3) 彼らは、ペテロと呼ばれるシモンがこの家に滞在しているかと尋ねた。

- ①この時ペテロは、外の喧噪に全く気づかなかった。
- ②彼は、幻の意味について集中して考えていたのである。

2. 19～20 節

Act 10:19 ペテロが幻について思い巡らしているとき、御霊が彼にこう言われた。「見なさい。三人の人があなたをたずねて来ています。」

Act 10:20 さあ、下に降りて行って、ためらわずに、彼らといっしょに行きなさい。彼らを遣わしたのはわたしです。」

- (1) 聖霊がペテロに語りかけた。
 - ①3 人の人がペテロを訪ねて来ている。
 - ②立って、下に降りて行け。
 - ③彼らといっしょに出発せよ。
 - ④彼らを遣わしたのはわたしなので、疑う必要はない。

3. 21～22 節

Act 10:21 そこでペテロは、その人たちのところへ降りて行って、こう言った。「あなたがたのたずねているペテロは、私です。どんなご用でおいでになったのですか。」

Act 10:22 すると彼らはこう言った。「百人隊長コルネリオという正しい人で、神を恐れかしこみ、ユダヤの全国民に評判の良い人が、あなたを自分の家にお招きして、あなたからお話を聞くように、聖なる御使いによって示されました。」

- (1) ペテロは、門のところに降りて行って、使者たちと対面した。
 - ①私がペテロである。
 - ②用件は何か。
- (2) 使者たちは、コルネリオの紹介をした。
 - ①地位は、百人隊長。
 - ②人格は、正しい人。
 - ③信仰は、神を恐れる異邦人。

- ④ユダヤ人との関係は、ユダヤ人に評判がいい。
- ⑤使者を派遣した理由は、天使の御告げを受けたから。

4. 23 節 a

Act 10:23 それで、ペテロは、彼らの中に入れて泊ませた。

- (1) ペテロは、翌朝早く旅立つ前に、彼らを家に招き入れた。
 - ①これは、食事への招待である。
 - ②ペテロはまだ食事を終えていなかった。
 - ③皮なめしのシモンのもてなしを、異邦人の使者たちにも提供したのである。
- (2) ペテロと皮なめしのシモンは、3 人の異邦人を家に迎え入れた。
 - ①彼らは、ユダヤ人と異邦人の間にあった壁を乗り越えたのである。
 - ②しかし、より高い壁があった。
 - *ユダヤ人が異邦人に招かれ、その家に滞在するというのがそれである。

結論

1. 恵みの時代における食物規定

- (1) ペテロが見た幻に抵抗を覚えるユダヤ人信者が、いまでもいる。
 - ①彼らは、異邦人を教会に受け入れることには同意している。
 - ②しかし、食物規定が終わったことには反発を覚えている。
 - ③大（異邦人の清め）が真理であるなら、小（食物の清め）も真理である。
- (2) 食物規定も含めたモーセの律法は、無効になった
 - ①2 コリ 3：6～11
 - ②ヘブ 8：6～13
 - ③それゆえ、食物規定に縛られる必要はない。
 - ④ただし、ユダヤ人信者には、食物規定を守る自由はある。
 - *そのことが、救いや清めに貢献するわけではない。

2. 3 度繰り返される教え

- (1) ペテロの訓練には、3 度という数字がよく登場する。
 - ①キリストを 3 度否んだこと（マコ 14：66～72）
 - ②キリストへの愛を 3 度告白したこと（ヨハ 21：15～17）
 - ③この箇所での、3 度の幻

(2) ペテロは、この幻によって、自分が試されていると感じたのであろう。

①決して、「はい、食べます」と言っただけだと思っただけであらう。

②このテストに合格しなければならないという思いが強かった。

③この幻には「落ち」がなかった。それで、思案していた。

3. ヨナとペテロの比較

(1) ヨナ1:1~3

Jon 1:1 アミタイの子ヨナに次のような【主】のことばがあった。

Jon 1:2 「立って、あの大きな町ニネベに行き、これに向かって叫べ。彼らの悪がわたしの前に上って来たからだ。」

Jon 1:3 しかしヨナは、【主】の御顔を避けてタルシシュへのがれようとし、立って、ヨッパに下った。彼は、タルシシュ行きの船を見つけ、船賃を払ってそれに乗り、【主】の御顔を避けて、みなといっしょにタルシシュへ行こうとした。

①ヨナは、異邦人伝道の使命を受けた。

②しかし、彼はニネベとは逆のタルシシュに逃れるために、ヨッパに来た。

(2) ペテロは、今ヨッパにいる。

①異邦人伝道の召命に、どう応答するかが問われている。

②彼は、ヨナの失敗から教訓を学んだはずである。

(3) 私たちも今、霊的ヨッパに置かれている。

①神の栄光をクリスチャン生活のゴールとせよ。

「ペテロとコルネリオの出会い」

使徒10：23b～33

1. はじめに

(1) 2つの幻が、コルネリオとペテロの出会いを作り出す。

- ①神がこの出会いを計画し、実現へと導かれた。
- ②この出会いにより、霊的化学反应が起こる。
- ③コルネリオが使者をヨッパに遣わすよりも、ペテロがカイザリヤを訪問する方が、はるかに大変で、画期的なことであった。

(2) 使10：23b～48までがひとつの「まとまり」である。

- ①ペテロとコルネリオの出会い（23b～33節）
- ②ペテロのメッセージ（34～43節）
- ③コルネリオの救い（44～48節）

(3) 今回は、①ペテロとコルネリオの出会い（23b～33節）だけを取り上げる。

- ①ペテロの異邦人向けのメッセージを簡単に済ませることはできない。
- ②さらに、異邦人が聖霊を受ける場面も、重要である。

2. アウトライン

- (1) ペテロのカイザリヤ訪問（23b～26節）
- (2) ペテロの質問（27～29節）
- (3) コルネリオの回答（30～33節）

結論

門から家に入るための4つのステップ

ペテロとコルネリオの出会いについて学ぶ。

I. ペテロのカイザリヤ訪問（23b～26節）

1. 23節b

Act 10:23b 明くる日、ペテロは、立って彼らといっしょに出かけた。ヨッパの兄弟たちも数人同行した。

(1) 翌日、ペテロとコルネリオの使者たちは、カイザリヤに向けて旅立った。

- ①昼食を終えた段階では、すでに時刻が遅くなっていた。

②そこで一行は、翌日、カイザリヤに向け出発した。

(2)「ヨッパの兄弟たちも数人同行した」

①同行したヨッパの兄弟たちの数は、使 11：12 によれば 6 人である。

Act 11:12 そして御霊は私に、ためらわずにその人たちといっしょに行くように、と言われました。そこで、この六人の兄弟たちも私に同行して、私たちはその人の家に入って行きました。

②使徒の働きの中では、2 人で行動する場面が多く出て来る。

③ここでは、その 3 倍である。

④ペテロを加えると、証人は 7 人となる（完全数）。

⑤異邦人の家を訪問するのは、批判の対象となる行為であった。

⑥ペテロは、自分の行動を弁護してくれる証人を必要とした。

2. 24 節

Act 10:24 その翌日、彼らはカイザリヤに着いた。コルネリオは、親族や親しい友人たちを呼び集め、彼らを待っていた。

(1)「その翌日、彼らはカイザリヤに着いた」

①1 日目：コルネリオが午後 3 時に御告げを受け、使者たちを派遣した。

②2 日目：使者たちは、正午ごろにヨッパに到着した。

③3 日目：ペテロと使者たちは、ヨッパを発った。途中で一泊した。

④4 日目：ペテロと使者たちは、午後 3 時前にカイザリヤに到着した。

(2) コルネリオは、ペテロが来てくれるという確信を持っていた。

①親族（遠い親戚）や親しい友人たちを呼び集め、ペテロの到着を待っていた。

②神に対する期待こそ、信仰の本質である。

3. 25～26 節

Act 10:25 ペテロが着くと、コルネリオは出迎えて、彼の足もとにひれ伏して拝んだ。

Act 10:26 するとペテロは彼を起こして、「お立ちなさい。私もひとりの人間です」と言った。

(1) コルネリオは、ペテロの足もとにひれ伏して拝んだ。

①神を恐れる異邦人であるコルネリオが、ペテロを礼拝したとは考えられない。

②これは、典型的なローマ人の儀礼的な反応である。

③しかしペテロは、これを礼拝と受け取った。

④「お立ちなさい。私もひとりの人間です」

(2) そう言いながら、ペテロは玄関（門）を通過し、家に入っていく。

①ついにペテロは、最大のバウンダリーを越えた。

②この瞬間、教会の歴史は動いた。

II. ペテロの質問（27～29 節）

1. 27～28 節

Act 10:27 それから、コルネリオとことばをかわしながら家に入り、多くの人が集まっているのを見て、

Act 10:28 彼らにこう言った。「ご承知のとおり、ユダヤ人が外国人の仲間に入ったり、訪問したりするのは、律法にかなわないことです。ところが、神は私に、どんな人のことでも、きよくないとか、汚れているとか言ってはならないことを示してくださいました。

(1) 家の中には、多くの人が集まっていた。

①そこには、期待感が満ちていた。

(2) ペテロの言葉

①ユダヤ人が異邦人とこのように交流することは、律法違反である。

*このことは、異邦人もよく知っていた。

②しかし神は、異邦人が汚れていると言ってはならないと教えてくださった。

*この時点で、ペテロは自分が見た幻の意味をよく理解できている。

(3) ユダヤ人と異邦人の交流は、口伝律法によって規定されていた。

①これは、優越感から出てくる分離ではない。

②儀式的清さを追求した結果、複雑な口伝律法が形成されたのである。

③ミシュナの「トラクテイト・アボダア・ザラ」は、このテーマを扱っている。

④そういう口伝律法が形成された理由

*歴史上、異邦人との接触がイスラエルに偶像礼拝をもたらした。

*王国時代が、その好例である。

*バビロン捕囚の直前の時代にも同じことが起こった。

⑤ヨハ 18 : 28

Joh 18:28 さて、彼らはイエスを、カヤパのところから総督官邸に連れて行った。時は明け方であった。彼らは、過越の食事が食べられなくなることはないように、汚れを受けまいとして、官邸に入らなかった。

2. 29 節

Act 10:29 それで、お迎えを受けたとき、ためらわずに来たのです。そこで、お尋ねしますが、あなたがたは、いったいどういうわけで私をお招きになったのですか。」

(1) ペテロは、聖霊の導きに従順に従った。

①「それで、お迎えを受けたとき、ためらわずに来たのです」

②この行為は、律法に熱心なユダヤ人たちには、到底受容できないものである。

(2) ペテロは、コルネリオが自分を招いた理由を尋ねた。

①使者たちから概略は聞いていたが、本人から直接聞く必要があった。

②伝道は、聖霊に導かれ、神のタイミングで実行する必要がある。

Ⅲ. コルネリオの回答 (30～33 節)

1. 30～31 節

Act 10:30 するとコルネリオがこう言った。「四日前のこの時刻に、私在家で午後三時の祈りをしていますと、どうでしょう、輝いた衣を着た人が、私の前に立って、

Act 10:31 こう言いました。『コルネリオ。あなたの祈りは聞き入れられ、あなたの施しは神の前に覚えられている。

Act 10:32 それで、ヨッパに人をやってシモンを招きなさい。彼の名はペテロとも呼ばれている。この人は海べにある、皮なめしのシモンの家に泊まっている。』

(1) コルネリオは、自分が体験したことを証言した。

①4 日前のこの時刻（午後 3 時）

②天使（輝いた衣を着た人）が自分の前に立った。

③天使は、こう語った。

＊あなたの祈りは聞き入れられている。

＊あなたの施しは神の前に覚えられている。

＊それゆえ、ヨッパに人をやってシモンを招きなさい。

＊彼の名は、ペテロとも呼ばれている。

＊彼は、海べにある皮なめしシモンの家に泊まっている。

2. 33 節

Act 10:33 それで、私はすぐあなたのところへ人を送ったのですが、よくおいでくださいました。いま私たちは、主があなたにお命じになったすべてのことを伺おうとして、みな神の御前に出ています。」

(1) あなたのところに人を送ったのは、天使がそう命じたからである。

- ①それ以外のことは、分らない。
- (2) 宗教的、文化的バウンダリーを越えて、よく来てくださった。
 - ①コルネリオは、ユダヤ人と異邦人の間にあった壁をよく知っていた。
- (3) コルネリオは、ペテロが神からのメッセージを持って来たことも知っていた。
 - ①「主があなたにお命じになったすべてのこと」
 - ②ギリシア語の動詞は、「プロスタツソウ」である。
 - *軍隊用語で、命令である。
 - ③神がペテロに命じたことを、自分たちは聞く用意ができています。
 - ④彼らは、神によって用意された最高の聴衆であった。

結論：門から家に入るための 4 つのステップ

(決断するための 4 つのステップ)

1. 御心を知る。

- (1) ペテロは、幻によって御心を知った。
- (2) 私たちの場合
 - ①聖霊を通して
 - ②みことばを通して
- (3) 神は、神を求める者にご自身を現わしてくださる。

2. 動機を吟味する。

- (1) 自分の願いか、神の御心か。
- (2) 聖句

Mat 6:10 御国が来ますように。／みこころが天で行われるように地でも行われますように。

Luk 22:42 「父よ。みこころならば、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、みこころのとおりにしてください。」

3. 意志の力を働かせる。

- (1) 決断とは、意志の力によって行動を起すことである。
- (2) 知、情、意は、相互に関連している。
 - ①知の要求は、御心を知ることによって満たされる。
 - ②情の要求は、神の御心を行いたいという願いによって満たされる。
 - ③意志は、知性が感情によって支えられたときに働き始める。

4. 神の恵みより頼む。

(1) 最も難しいのは、困難な道を選ぶことである。

(2) 神の恵みは、日々私たちを支える力となる。

①神は、私たちの過去、現在、未来をご存じである。

(3) 恵みによる決断の表明

Jos 24:15 もしも【主】に仕えることがあなたがたの気に入らないなら、川の向こうにいたあなたがたの先祖たちが仕えた神々でも、今あなたがたが住んでいる地のエモリ人の神々でも、あなたがたが仕えようと思うものを、どれでも、きょう選ぶがよい。私と私の家とは、【主】に仕える。」

「異邦人の救い」
使徒 10 : 34～48

1. はじめに

(1) 2 つの幻が、コルネリオとペテロの出会いを作り出す。

- ①異邦人がユダヤ人の家に行くよりも、ユダヤ人が異邦人の家に行く方が難しい。
- ②ペテロがコルネリオの家に行ったのは、画期的な出来事であった。

(2) 使 10 : 23b～48 がひとつの「まとまり」である。

- ①ペテロとコルネリオの出会い（23b～33 節）
- ②ペテロのメッセージ（34～43 節）
- ③コルネリオの救い（44～48 節）

＊今回は、②と③を取り上げる。

(3) 教会は、使 2 章で誕生した。

- ①最初は、ユダヤ人信者だけで構成されていた（2 章）。
- ②次にサマリヤ人信者が加えられた（8 章）。
- ③ここで、異邦人信者が加えられる（10 章）。

2. アウトライン

(2) ペテロのメッセージ（34～43 節）

- ①ペテロの発見（34～35 節）
- ②イエスの死（36～39 節）
- ③イエスの復活（40～43 節）

(3) コルネリオの救い（44～48 節）

- ①聖霊によるバプテスマ（44 節）
- ②ユダヤ人信者の驚き（45～46 節 a）
- ③洗礼（46b～48 節）

結論：聖霊によるバプテスマ

(1) 3 つの事例

(2) 私たちの聖霊のバプテスマ

異邦人の救いについて学ぶ。

Ⅱ. ペテロのメッセージ (34～43 節)

1. ペテロの発見 (34～35 節)

(1) 34～35 節

Act 10:34 そこでペテロは、口を開いてこう言った。／「これで私は、はっきりわかりました。神はかたよったことをなさらず、

Act 10:35 どの国の人であっても、神を恐れかしこみ、正義を行う人なら、神に受け入れられるのです。

①口を開いた。

＊重要なメッセージが始まることを意味する定型句

②はっきりわかった。幻の意味を理解した。

＊ペテロは、コルネリオの家に入った結果、真理を知性で理解した。

③理解した内容

＊神はえこひいきをしないお方である。

・申 10 : 17、2 歴 19 : 7、ロマ 2 : 11

＊ユダヤ人たちには誤解があった。

・自分たちは、アブラハムの子孫なので、御国の子たちである。

・バプテスマのヨハネは、そのような考え方を叱責した。

＊ペテロは、異邦人も信仰があれば神に受け入れられることを発見した。

＊使 2 : 39

Act 2:39 なぜなら、この約束は、あなたがたと、その子どもたち、ならびにすべての遠くに
いる人々、すなわち、私たちの神である主がお召しになる人々に与えられているからです。」

＊ペテロは、異邦人はユダヤ教に改宗してから救われると考えていた。

＊この発見をエルサレムの兄弟たちに理解してもらうのは、難しい。

2. イエスの死 (36～39 節)

(1) 36 節

Act 10:36 神はイエス・キリストによって、平和を宣べ伝え、イスラエルの子孫にみことば
をお送りになりました。このイエス・キリストはすべての人の主です。

①ペテロのメッセージの内容は、マルコの福音書のアウトラインになっている。

＊マルコは、ペテロの影響を受けていた。

＊教えよりも、行動、奇跡、死、復活、大宣教命令に焦点が合わさっている。

②イエスは、神がイスラエルの子孫に送ったロゴスである。

③ロゴスは人として来られ、平和を宣べ伝えた。

＊神と人との平和、人と人の平和、民族と民族の平和

- ④イエス・キリストはすべての人（ユダヤ人と異邦人）の主である。
＊これは、喜びと勝利の挿入句である。

(2) 37～38 節

Act 10:37 あなたがたは、ヨハネが宣べ伝えたバプテスマの後、ガリラヤから始まって、ユダヤ全土に起こった事がらを、よくご存じです。

Act 10:38 それは、ナザレのイエスのことです。神はこの方に聖霊と力を注がれました。このイエスは、神がともにおられたので、巡り歩いて良いわざをなし、また悪魔に制せられているすべての者をいやされました。

- ①イエスの紹介が、バプテスマのヨハネから始まる。
＊バプテスマのヨハネは、水で人々にバプテスマを授けた。
＊神は、聖霊でイエスにバプテスマを授けた。

②訳文の比較

「神はこの方に聖霊と力を注がれました」（新改訳）

「神はこのイエスに聖霊と力によって油を注がれました」（新改訳 2017）

「神は、聖霊と力によってこの方を油注がれた者となさいました」（新共同訳）

「神はナザレのイエスに聖霊と力とを注がれました」（口語訳）

「God anointed him with the Holy Spirit and with power:」（ASV）

＊メシアという言葉は使っていないが、これはメシア宣言である。

＊神は、イエスがメシア（油注がれた者）であると宣言された。

- ③これは、イザ 61：1～2 の成就である。
④その結果、イエスはかずかずの奇跡や癒しを行われた。

(3) 39 節

Act 10:39 私たちは、イエスがユダヤ人の地とエルサレムとで行われたすべてのことの証人です。人々はこの方を木にかけて殺しました。

- ①使徒たちは、イエスの公生涯の証人である。
②さらに、ユダヤ人たちがイエスを十字架に架けて殺したことの証人である。
③これまでに、ペテロは 3 回イエスを殺したことの責任をユダヤ人たちに問うた。
＊使 3：15、4：10、5：30
④ステパノも同じようにユダヤ人たちを糾弾した。
＊使 7：52

3. イエスの復活（40～43 節）

(1) 40～41 節

Act 10:40 しかし、神はこのイエスを三日目によみがえらせ、現れさせてくださいました。

Act 10:41 しかし、それはすべての人々にではなく、神によって前もって選ばれた証人である私たちにです。私たちは、イエスが死者の中からよみがえられて後、ごいっしょに食事をしました。

①しかし、神はこのイエスを 3 日目に復活させた。

②イエスは、少人数の信者だけに現れた。

*1 コリ 15 : 6 によれば、約 500 人である。

③「前もって選ばれた証人である私たち」

*イエスは、ご自分を現わす対象となる人数を限定された。

*出エジは、不信仰な者は奇跡を見ても神を信じないことを示している。

*ルカ 16 : 31

Luk 16:31 アブラハムは彼に言った。『もしモーセと預言者との教えに耳を傾けないのなら、たといだれかが死人の中から生き返っても、彼らは聞き入れはしない。』

*真珠を豚に投げない。

④使徒たちは、復活のイエスと食事をした。

*復活のイエスは幻ではなく、肉体を持っておられた。

(2) 42～43 節

Act 10:42 イエスは私たちに命じて、このイエスこそ生きている者と死んだ者とのさばき主として、神によって定められた方であることを人々に宣べ伝え、そのあかしをするように、言われたのです。

Act 10:43 イエスについては、預言者たちもみな、この方を信じる者はだれでも、その名によって罪の赦しが受けられる、とあかししています。」

①イエスは、使徒たちに大宣教命令を与えた。

②ペテロは、異邦人の聴衆を意識して、メシア預言を引用していない。

③イエスを「生きている者と死んだ者とのさばき主」として紹介した。

*「メシア」ではなく、「さばき主」（審判者、judge）という用語を使用した。

④さばき主の裁きを免れるためには、その名を信じるしか方法がない。

III. コルネリオの救い（44～48 節）

1. 聖霊によるバプテスマ（44 節）

(1) 44 節

Act 10:44 ペテロがなおもこれらのことばを話し続けているとき、みことばに耳を傾けていたすべての人々に、聖霊がお下りになった。

①ペテロのメッセージはまだ終わっていなかった。

＊復活と大宣教命令に続く次のテーマは、再臨である。

＊そのテーマに入る前に、聖霊が聴衆の上にお下りになった。

②彼らは、イエスが救い主であると信じて救われたのである。

＊聖霊が下ったのは、彼らが救われたからである。

＊祈る前に、罪を告白する前に、洗礼を受ける前に、信仰だけで救われた。

2. ユダヤ人信者の驚き（45～46 節 a）

（1）45～46 節 a

Act 10:45 割礼を受けている信者で、ペテロといっしょに来た人たちは、異邦人にも聖霊の賜物が注がれたので驚いた。

Act 10:46a 彼らが異言を話し、神を賛美するのを聞いたからである。

①ペテロに同行してきた 6 人のユダヤ人信者は驚いた。

②訳文の比較

「異邦人にも聖霊の賜物が注がれたので驚いた」（新改訳）

（新改訳 2017）、（新共同訳）、（口語訳）の訳もすべて「聖霊の賜物」である。

「【聖霊】が賜物として異邦人の上にも注がれたのを見て驚いた」（回復訳）

＊「聖霊の賜物」と「御霊の賜物」（霊的な賜物）を混同してはならない。

③ユダヤ人信者が驚いた理由は、異邦人に聖霊が賜物して注がれたからである。

＊聖霊が注がれたことは、異言によって知ることができた。

＊驚きの理由は、異邦人もユダヤ人と同じ原則で救われたからである。

3. 洗礼（46b～48 節）

（1）46b～47 節

Act 10:46b そこでペテロはこう言った。

Act 10:47 「この人たちは、私たちと同じように、聖霊を受けたのですから、いったいだれが、水をさし止めて、この人たちにバプテスマを受けさせないようにすることができましょうか。」

①ペテロは、異邦人たちが信仰によって救われたことを認識した。

②神の御業に逆らうことのできる人はいない。

③この質問は、「ノー」という答を予測する質問である。

（2）48 節

Act 10:48 そして、イエス・キリストの御名によってバプテスマを受けるように彼らに命じた。彼らは、ペテロに数日間滞在するように願った。

①ペテロは、コルネリオとその親族、友人たちに、洗礼を受けるように命じた。

＊地中海に出て行って、洗礼を受けたことであろう。

②この箇所から、幼児洗礼を主張するのは無理がある。

③彼らの願いに応じて、ペテロは数日間滞在した。

＊霊的幼子たちに、信仰の基本を教えたのであろう。

結論：聖霊によるバプテスマ

1. 3つの事例

(1) 聖霊によるバプテスマは、一定のパターンで起こったわけではない。

①ユダヤ人信者の聖霊によるバプテスマ（使 2 章）

＊激しい風が吹いて来るような響きと炎のような分かれた舌

②サマリア人信者の聖霊によるバプテスマ（使 8 章）

＊ペテロとヨハネによる按手（彼らの上に手を置くと）

③異邦人信者の聖霊によるバプテスマ（使 10 章）

＊ペテロのメッセージの途中で（話し続けていると）

④共通しているのは、異言で話し出したということ。

＊この異言は、御霊の賜物としての異言ではない。

＊この異言は、聖霊によるバプテスマを受けたことのしるしであった。

2. 私たちの聖霊によるバプテスマ

(1) 使徒の働きは、移行期の記録である。

①使徒たちが経験したのと同じ経験を求めるべきではない。

②使徒たちが教えたことから学ぶべきである。

(2) 1 コリ 12 : 13

1Co 12:13 なぜなら、私たちはみな、ユダヤ人もギリシヤ人も、奴隷も自由人も、一つのからだとなるように、一つの御霊によってバプテスマを受け、そしてすべての者が一つの御霊を飲む者とされたからです。

(3) ロマ 8 : 9

Rom 8:9 けれども、もし神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるなら、あなたがたは肉の中にはなく、御霊の中にいるのです。キリストの御霊を持たない人は、キリストのものではありません。

(4) エペ 5 : 18

Eph 5:18 また、酒に酔ってははいけません。そこには放蕩があるからです。御霊に満たされなさい。

「割礼を受けた者たちへの弁明」

使徒 11：1～18

1. はじめに

(1) 教会は、使 2 章で誕生した。

①最初は、ユダヤ人信者だけで構成されていた（2 章）。

②次にサマリヤ人信者が加えられた（8 章）。

③最後に、異邦人信者が加えられた（10 章）。

(2) ペテロはコルネリオの家を訪問した。

①彼は、そこに集まっていた人たちに福音を語った。

②語っている途中に、聖霊が彼らの上に下った。

*異邦人は、ユダヤ教に改宗しなくても救われた。

③信じた者たちは、洗礼を受けた。

④ペテロは、数日間そこに留まった。

2. アウトライン

(1) ペテロに向けられた非難（1～3 節）

(2) ペテロの弁明（4～17 節）

(3) 弁明の結果（18 節）

結論：メシアニックジューの食事

(1) コルネリオの家でのペテロ

(2) アンテオケでのペテロ

(3) 現代のメシアニックジュー

割礼を受けた者たちへのペテロの弁明について学ぶ。

I. ペテロに向けられた非難（1～3 節）

1. 1 節

Act 11:1 さて、使徒たちやユダヤにいる兄弟たちは、異邦人たちも神のみことばを受け入れた、ということを耳にした。

(1) ペテロがエルサレムに帰還する前に、噂が広範囲に伝わっていた。

①カイザリヤからの知らせが、エルサレムだけでなくユダヤ全域に伝わった。

②サマリヤ人の救いは、許容範囲のことであった。

*サマリヤ人は、ユダヤ人とは半分兄弟の関係にあった。

③しかし、異邦人の救いは、想定外のことであった。

2. 2～3節

Act 11:2 そこで、ペテロがエルサレムに上ったとき、割礼を受けた者たちは、彼を非難して、

Act 11:3 「あなたは割礼のない人々のところに行って、彼らといっしょに食事をした」と言っ

った。

(1) エルサレムに帰還したペテロを待っていたのは、激しい非難の言葉であった。

①教会は、分裂の危機に直面した。

②「割礼を受けた者たち」とは、ユダヤ人信者のことである。

*エルサレム教会の信者は、ユダヤ人だけである。

*つまり、エルサレム教会の信者のほぼ全員がペテロを非難したのである。

*彼らは、異邦人は救われる前に割礼を受けなければならないと考えていた。

③使徒たちのリーダーであるペテロが、初めて挑戦を受けた。

(2) 非難の理由

①異邦人にみことばを語り、救いに導いた、というのが理由ではない。

②異邦人のもてなしを受けたということが、非難の理由である。

*ローマ人の家に入った。

*食事のもてなしを受けた。

*客間で寝た。

③異邦人は儀式的に汚れているという考え方が根底にある。

④ペテロがなぜ「汚れた動物の幻」を見せられたかが、次第に明らかになる。

(3) ユダヤ人信者たちは、ユダヤ人伝道への悪影響を恐れたのであろう。

①ペテロが衝動的に行動する人物であることは分かるが、これはやり過ぎである。

②ユダヤ人たちは、異邦人と親しくしている者の言葉に耳を傾けないはずだ。

③しばらく平和な時期が続いたが、これでユダヤ人伝道の可能性が閉ざされた。

II. ペテロの弁明 (4～17節)

1. 4節

Act 11:4 そこでペテロは口を開いて、事の次第を順序正しく説明して言った。

(1) ペテロは、何が起こったかを時系列順に説明した。

①汚れた動物の幻（使 10：9～16）

②それに続く出来事（使 10：17～48）

2. 5～7 節

Act 11:5 「私がヨッパの町で祈っていると、うっとり夢ごちになり、幻を見ました。四隅をつり下げられた大きな敷布のような入れ物が天から降りて来て、私のところに届いたのです。

Act 11:6 その中をよく見ると、地の四つ足の獣、野獣、はうもの、空の鳥などが見えました。

Act 11:7 そして、『ペテロ。さあ、ほふって食べなさい』という声を聞きました。

(1) ペテロは、きよい動物ときよくない動物が敷布の中にいたことを強調した。

①ここでは、新しい情報が追加されている。ペテロの体験談となっている。

＊「天から降りて来て」

＊「私のところに届いた」

＊「その中をよく見ると」

＊「野獣」（野の獣）

(2) さらに彼は、天からの声の内容を強調した。

①これは、バット・コルである。

②父なる神からの語りかけである。

③「ペテロ。さあ、ほふって食べなさい」

3. 8～10 節

Act 11:8 しかし私は、『主よ。それはできません。私はまだ一度も、きよくない物や汚れた物を食べたことはありません』と言いました。

Act 11:9 すると、もう一度天から声がして、『神がきよめた物を、きよくないと言ってはならない』というお答えがありました。

Act 11:10 こんなことが三回あって後、全部の物がまた天へ引き上げられました。

(1) ペテロは、それらの物を食べることを拒否した。

①「一度も、…食べたことはありません」（新改訳）

②「まだ一度も口に入れたことはありません」（新改訳 2017）

(2) もう一度、バット・コルが下った。

①「神がきよめた物を、きよくないと言ってはならない」

(3) 同じことが 3 回繰り返された。

①ペテロの訓練には、3という数字が付きものである。

4. 11～12 節

Act 11:11 すると、どうでしょう。ちょうどそのとき、カイザリヤから私のところへ遣わされた三人の人が、私たちのいた家の前に来ていました。

Act 11:12 そして御霊は私に、ためらわずにその人たちといっしょに行くように、と言われました。そこで、この六人の兄弟たちも私に同行して、私たちはその人の家に入って行きました。

(1) ペテロがカイザリヤに行ったのは、自分の考えによるのではない。

①カイザリヤから遣わされた3人の使者が家の前に来た。

②聖霊が、ためらわずに彼らとともに行くようにと言われた。

③そこで、その命令に従った。

(2) 神の權威によって自らの行為を正当化するのは、古代世界での常套手段である。

①6人の兄弟たちがペテロに同行した。

②彼らは、ペテロの行為を弁護する証人たちである。

*2人の証人（最低限の人数）×3=6人の証人

③「この六人の兄弟たち」と言いながら、ペテロは彼らを指さしたことであろう。

(3) 話は、旅程を省略して、コルネリオの家に入ったところに飛ぶ。

5. 13～14 節

Act 11:13 その人が私たちに告げたところによると、彼は御使いを見ましたが、御使いは彼の家の中に立って、『ヨッパに使いをやって、ペテロと呼ばれるシモンを招きなさい。』

Act 11:14 その人があなたとあなたの家にいるすべての人を救うことばを話してくれます』と言ったということです。

(1) コルネリオが見た幻

①天使は、ヨッパにいるペテロと呼ばれるシモンを招くように命じた。

②その人があなたとあなたの家にいるすべての人を救うことばを話してくれる。

*この時点では、コルネリオとその家の人たちは、救われていなかった。

6. 15～16 節

Act 11:15 そこで私が話し始めると、聖霊が、あの最初のとき私たちにお下りになったと同じように、彼らの上にもお下りになったのです。

Act 11:16 私はそのとき、主が、『ヨハネは水でバプテスマを授けたが、あなたがたは、聖霊

によってバプテスマを授けられる』と言われたみことばを思い起こしました。

- (1) 話を聞いていた彼らの上に、聖霊が下った。
 - ①これは、彼らが救われたことの証明である。
 - ②「あの最初のとき私たちにお下りになったと同じように、」
 - ③これは、ペンテコステの日（使 2 章）に起こったことへの言及である。
 - ④異言で語ったことが、聖霊を受けたことのしるしとなった。
- (2) ここでペテロは、主イエスのことばを思い出した。
 - ①『ヨハネは水でバプテスマを授けたが、あなたがたは、聖霊によってバプテスマを授けられる』
 - ②主イエスのこの約束が、異邦人の上にも成就した。

7. 17 節

Act 11:17 こういうわけですから、私たちが主イエス・キリストを信じたとき、神が私たちに下さったのと同じ賜物を、彼らにもお授けになったのなら、どうして私などが神のなさることを妨げることができません。」

- (1) 神は、信じた異邦人に同じ賜物をお授けになった。
 - ①「同じ賜物」とは、「賜物としての聖霊」である。
 - ②この点に関しては、ユダヤ人と異邦人の区別はない。
 - ③異邦人も、信じるだけで救われ、聖霊を受ける。
- (2) 人間は、神の業に逆らうことができない。
 - ①ペテロの行為を批判する人は、神の業に逆らっているのである。

Ⅲ. 弁明の結果（18 節）

1. 18 節

Act 11:18 人々はこれを聞いて沈黙し、「それでは、神は、いのちに至る悔い改めを異邦人にもお与えになったのだ」と言って、神をほめたたえた。

- (1) ユダヤ人信者たちは、ペテロの弁明に納得した。
 - ①彼らは、沈黙した。
 - ②彼らは、異邦人を救った神をほめたたえた。
 - ③恐らく彼らは、この異邦人の救いを例外的なものとして理解したのであろう。
 - ④多くの者が、異邦人はまずユダヤ教に改宗する必要があると考えていた。

(2) この出来事は、2 つの重大な結果をもたらした。

①教会は、一致を保つことができた。

②教会時代の信者と神殿で礼拝する者の間に、くさびが打ち込まれた。

＊ユダヤ教が教会を迫害する時代に入っていく。

結論：メシアニックジューの食事

1. コルネリオの家でのペテロ

(1) ペテロが直ちに不浄な食物を食したと考える必要はない。

①不浄な食物を食べることを許可することと、実際に食べることは別である。

②コルネリオは、食事の準備に約 4 日間の期間が与えられた。

③彼は、ペテロのために食事を準備したはずである。

(2) ペテロは、以下のようなものを食べたのであろう。

①野菜、果物、乳製品、パンなど

2. アンテオケでのペテロ

(1) ガラ 2 : 11～13

Gal 2:11 ところが、ケパがアンテオケに来たとき、彼に非難すべきことがあったので、私は面と向かって抗議しました。

Gal 2:12 なぜなら、彼は、ある人々がヤコブのところから来る前は異邦人といっしょに食事をしていてのに、その人々が来ると、割礼派の人々を恐れて、だんだんと異邦人から身を引き、離れて行ったからです。

Gal 2:13 そして、ほかのユダヤ人たちも、彼といっしょに本心を偽った行動をとり、バルナバまでもその偽りの行動に引き込まれてしまいました。

①ここでのペテロの行為は、使 11 章で語っている内容と矛盾する。

②アンテオケでのペテロは、異邦人といっしょに食事をしていて。

③しかし、割礼派のユダヤ人たちがやって来ると、異邦人から離れて行った。

④パウロは、福音の真理を守るために、ペテロを糾弾した。

(2) 私たちへの教訓

①知的理解と感情的な感覚が一致するためには、時間がかかる。

②神から目が離れると、どんな人でも肉の状態に戻ってしまう。

3. 現代のメシアニックジュー

(1) 食事内容によって、その人の霊性を判定してはならない。

(2) 彼らには、食物規定を守る自由も、守らない自由もある。

「アンテオケ教会の誕生と成長」

使徒 11：19～26

1. はじめに

(1) この箇所は、使 8：4 とつながっている。

Act 8:4 他方、散らされた人たちは、みことばを宣べながら、巡り歩いた。

①この後、ピリポはサマリヤの町で伝道した。

②それ以外の人たちがどうなったのかという話が、ここから始まる。

(2) これまでの教会成長の過程

①最初は、ユダヤ人信者だけで構成されていた（2 章）。

②次にサマリヤ人信者が加えられた（8 章）。

③最後に、異邦人信者が加えられた（10 章）。

*とは言え、カイザリヤの信者は少数であった。

*もし大量の異邦人信者が教会に加えられたら、どうなるか。

*ユダヤ人信者と異邦人信者の人口バランスが崩れる。

*ユダヤ人伝道の将来が心配になる。

④アンテオケ教会の誕生と成長は、神によるものである。

2. アウトライン

(1) アンテオケでの異邦人伝道（19～21 節）

(2) バルナバの派遣（22～24 節）

(3) サウロの再登場（25～26 節）

結論：クリスチャンという呼び名

アンテオケ教会の誕生と成長について学ぶ。

I. アンテオケでの異邦人伝道（19～21 節）

1. 19 節

Act 11:19 さて、ステパノのことから起こった迫害によって散らされた人々は、フェニキヤ、キプロス、アンテオケまでも進んで行ったが、ユダヤ人以外の者にはだれにも、みことばを語らなかった。

(1) ステパノの死をきっかけに、エルサレムの教会に対する大規模な迫害が起こった。

①ヘレニストのユダヤ人信者たちは、エルサレムから逃避した。

②彼らは、ディアスポラのユダヤ人共同体が存在する町々に散って行った。

(2) エルサレムからアンテオケまでのルート

- ①フェニキヤ（イスラエルの北、地中海沿岸沿いの地域。現在のレバノン）
- ②キプロス（イスラエルと小アジアの間に浮かぶ島。バルナバの故郷）
- ③ダマスコ（すでに取り上げたので、ここには出て来ない）
- ④アンテオケ（シリアのアンテオケ。1939 年にトルコ領に編入された）

*エルサレムから約 500 キロの距離にある。

(3) 彼らは、ユダヤ人にしか「みことば」（福音）を語らなかった。

- ①これは、カイザリヤの出来事について知らなかった時のことである。
- ②異邦人伝道は、彼らの発想の中にはなかった。
- ③それゆえ、ユダヤ人伝道だけを行っていた。

*ディアスポラのユダヤ人共同体を訪問しての伝道である。

2. 20 節

Act 11:20 ところが、その中にキプロス人とクレネ人が幾人かいて、アンテオケに来てからはギリシヤ人にも語りかけ、主イエスのことを宣べ伝えた。

(1) アンテオケという町

- ①古代世界には、同名の町が 16 もあった。
- ②シリアのアンテオケが最も大きく、最も有名であった。

*シリア属州の首都で、ローマ、アレキサンドリアに次ぐ 3 番目の都市。

*人口は 50 万人前後。

*この町のユダヤ人人口は、約 14 パーセント。

- ③交通の要衝の地（東と西を結ぶ地）
- ④罪と偶像礼拝で有名な町

*アシュタロテ礼拝と神殿娼婦

(2) アンテオケに来てから、異邦人伝道を開始した人たちがいた。

- ①キプロス人（キプロス島出身のユダヤ人）
- ②クレネ人（北アフリカのクレネ出身のユダヤ人）
- ③彼らは、全員ヘレニストのユダヤ人である（ディアスポラのユダヤ人）。
- ④彼らの行動は、画期的なものであった。

(3) 伝道の対象は、ギリシヤ人であった。

①彼らは、神を恐れる異邦人であったと思われる。

②彼らは、コルネリオと同じような霊的状态にあった。

*彼らには、福音のメッセージを理解する素地があった。

(4) 彼らは、「主イエスのことを宣べ伝えた」。

①ユダヤ人に対してはイエスがメシアであることを強調する。

②しかし、異邦人に対してはイエスが主であることを強調する。

3. 21 節

Act 11:21 **そして、主の御手が彼らとともにあったので、大ぜいの人が信じて主に立ち返った。**

(1) 「主の御手が彼らとともにあった」

①これは、旧約聖書的表現である。

②神が異邦人伝道に同意されたという意味である。

(2) 「大ぜいの人が信じて主に立ち返った」

①信じるということと主に立ち返るということを、別の行動と考える必要はない。

②この2つのことは、同時に起こっている。

(3) 「主」(キュリオス) という言葉

①「主の御手が彼らとともにあった」の「主」は、神を指す。

②「主に立ち返った」の「主」は、キリストを指す。

③初期の頃から、信者たちはイエスの神性を信じていた。

II. バルナバの派遣 (22～24 節)

1. 22 節

Act 11:22 **この知らせが、エルサレムにある教会に聞こえたので、彼らはバルナバをアンテオケに派遣した。**

(1) エルサレム教会は、すぐに反応した。

①多くの異邦人信者が教会に加えられると、教会内の人口バランスが崩れる。

②大混乱に陥る危険性があった。

③そこで母教会は、代表としてバルナバを派遣した。

*レビ人、ディアスポラの地出身のヘレニストのユダヤ人、使徒

*バルナバは、非常に信頼されていた。

2. 23～24 節

Act 11:23 彼はそこに到着したとき、神の恵みを見て喜び、みなが心を堅く保って、常に主にとどまっているようにと励ました。

Act 11:24 彼はりっぱな人物で、聖霊と信仰に満ちている人であった。こうして、大ぜいの人が主に導かれた。

(1) 彼は、アンテオケでの霊的覚醒は神からのものであると確信した。

①異邦人の救いは、神の恵みによることである。

②神の恵みは、喜びの源である。

(2) 慰めの子バルナバは、兄弟たちを励ました。

「みなが心を堅く保って、常に主にとどまっているようにと励ました」(新改訳)

「心を堅く保っていつも主にとどまっているようにと、皆を励ました」(新改訳 2017)

「固い決意をもって主から離れることのないようにと、皆に勧めた」(新共同訳)

「主に対する信仰を揺るがない心で持ちつづけるようにと、みんなの者を励ました」

(口語訳)

①感動的な霊的体験の後に、空白がやって来る。

②異教的な町に住む者には、誘惑がやって来る。

(3) バルナバの描写

①立派な人物であった。

②聖霊に満ちていた。

③信仰に満ちていた。

(4) 「こうして、大ぜいの人が主に導かれた」

「こうして、大勢の人たちが主に導かれた」(新改訳 2017)

「こうして、多くの人が主へと導かれた」(新共同訳)

「こうして主に加わる人々が、大ぜいになった」(口語訳)

「ここに多くの人々、主に加はりたり」(文語訳)

「and much people was added unto the Lord.」(ASV)

①教会の人数が増加したということ。

*ユダヤ人信者と異邦人信者が混在していた。

②バルナバはそのままアンテオケに留まり、2年ほど奉仕を続けたと思われる。

③自分ひとりの手に負えない段階になったので、サウロをそこに招くことにした。

*サウロは、ユダヤ人伝道と異邦人伝道を行うためには、最適の人物である。

Ⅲ. サウロの再登場（25～26 節）

1. 25～26 節 a

Act 11:25 バルナバはサウロを捜しにタルソへ行き、

Act 11:26a 彼に会って、アンテオケに連れて来た。

(1) サウロは、タルソに住んでいた。

①使 9：30 の出来事は、約 5 年前の出来事である。

Act 9:30 兄弟たちはそれと知って、彼をカイザリヤに連れて下り、タルソへ送り出した。

②サウロは、タルソ近辺で活発に伝道していたはずである。

③さらに、「シリヤ、キリキヤの地方」でも伝道していた（ガラ 1：21）。

④サウロは、多くのものを失いながら、伝道していた。

⑤ピリ 3：8～9

Php 3:8 それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくとと思っています。それは、私には、キリストを得、また、

Php 3:9 キリストの中にある者と認められ、律法による自分の義ではなくて、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基づいて、神から与えられる義を持つことができる、という望みがあるからです。

(2) バルナバは、サウロを使徒たちに紹介したことがあった。

①彼は、サウロこそアンテオケ教会での奉仕にふさわしい人物だと確信した。

②そこで、約 160 キロを旅して、サウロを探し出した。

③そしてサウロをアンテオケに連れて来た。

2. 26 節 b

Act 11:26b そして、まる一年の間、彼らは教会に集まり、大ぜいの人たちを教えた。弟子たちは、アンテオケで初めて、キリスト者と呼ばれるようになった。

(1) バルナバとサウロによる弟子訓練は、まる一年の間続いた。

①多くのユダヤ人信者と異邦人信者が、訓練を受けた。

②この教会における異邦人信者の数は、少なくとも 3 分の 1 を越えたと思われる。

(2) 「弟子たちは、アンテオケで初めて、キリスト者と呼ばれるようになった」

①「キリスト者」＝「クリスチャン」＝「クリスティアノス」（ギリシア語）

②これは、外部の者が信者に付けたあだ名だと思われる。

③異邦人信者は、「クリスチャン」と呼ばれた。

④ユダヤ人信者は、「ナザレ人」と呼ばれた（使 24：5）。

結論：クリスチャンという呼び名

(1) ユダヤ人信者は、いくつかの理由で、自分のことをクリスチャンとは呼ばない。

①キリスト教会がユダヤ人を迫害した歴史を考えると、心情的に受け入れられない。

②ユダヤ人伝道のためには、クリスチャンという呼び名を避けた方がよい。

③元々、クリスチャンという呼称には軽蔑の意味が込められている。

(2) ユダヤ人信者の呼称

①ナザレ人（使 24：5）

②この道の者（使 9：2）

③弟子（使 6：1～2）

④信者（使 4：32）

⑤ジューズ・フォー・ジーザス

⑥メシアニックジュー

⑦メシアニック

⑧ユダヤ人信者

⑨ユダヤ人クリスチャン

⑩ヘブル人クリスチャン

(3) メシアニック（ヘブル語）＝クリスチャン（ギリシア語）

①どの呼び名であっても、キリストを信じた人は神の家族である。

②共通事項

*私たちは、キリストを通して神と和解した。

*私たちは、聖霊を受けている。聖霊の油注ぎ。

*私たちの内に、キリストが生きておられる。

「アンテオケ教会の善行」

使徒 11：27～30

1. はじめに

(1) これまでの教会成長の過程

①最初は、ユダヤ人信者だけで構成されていた（2 章）。

②次にサマリヤ人信者が加えられた（8 章）。

③最後に、異邦人信者が加えられた（10 章）。

＊とは言え、カイザリヤの信者は少数であった。

＊もし大量の異邦人信者が教会に加えられたら、どうなるか。

＊ユダヤ人信者と異邦人信者の人口バランスが崩れる。

＊アンテオケ教会の誕生と成長は、神によるものである。

(2) 当時のキリスト教会は、楕円形のイメージで表現できる。

①ひとつの焦点は、エルサレム教会（ユダヤ人教会）。

②もうひとつの焦点は、アンテオケ教会（異邦人教会）。

(3) 2 つの教会は、親密な交わりを維持していた。

①アンテオケ教会は、ユダヤ人信者を支援する最初の異邦人教会となる。

②ここには、現代に適用される霊的原則がある。

2. アウトライン

(1) 預言者アガボの預言（27～28 節）

(2) アンテオケ教会の信者たちの準備（29 節）

(3) 善行の実行（30 節）

結論：

(1) 旧約聖書の預言者たち

(2) 新約聖書の預言者たち

(3) 現代の預言者たち

アンテオケ教会の善行について学ぶ。

I. 預言者アガボの預言（27～28 節）

1. 27 節

Act 11:27 そのころ、預言者たちがエルサレムからアンテオケに下って来た。

(1) 「そのころ」

- ①バルナバとサウロがアンテオケ教会で奉仕を初めて約 1 年後
- ②紀元 44 年頃であろう。

(2) 「預言者たち」

- ①預言者とは、神の啓示を直接受け取り、権威をもって民に伝える人である。
- ②ラビたちは、最後の預言者はマラキ（前 5 世紀）であると教えていた。
 - *彼らは、マラキを最後に、公式な預言は終わったと教えていた。
- ③しかし、使徒の働きの中には数名の預言者たちが登場する。
 - *アンテオケ教会にも預言者たちがいた。

Act 13:1 さて、アンテオケには、そこにある教会に、バルナバ、ニゲルと呼ばれるシメオン、クレネ人ルキオ、国主ヘロデの乳兄弟マナエン、サウロなどという預言者や教師がいた。

- ④預言者の一団が、エルサレムからアンテオケに下って来た。
 - *これは、両教会の間に親密な交流があったことの証拠である。

2. 28 節

Act 11:28 その中のひとりでアガボという人が立って、世界中に大ききんが起これと御霊によって預言したが、はたしてそれがクラウデオの治世に起こった。

- (1) 預言者の一団のリーダーは、アガボという預言者であった。
 - ①彼は、使徒の働きの中で 2 つの預言を語っているが、これが最初のものである。
 - ②次の預言は、使 21 : 10～11 に出て来る。
- (2) 彼は、世界中を襲おうとしている大ききんに備えるように警告を発した。
 - ①彼は、御霊によって預言した。
 - ②世界中とは、当時のローマ世界全体である。
 - ③アンテオケ教会は、恐らく経済的に裕福な教会であったと思われる。
 - ④エルサレム教会は、貧しい教会であった。
 - *初期の頃は、弟子たちは自分の持ち物を売ってそれを共有していた。
 - *この方法は、やがて資産の枯渇に至る。
 - ⑤この預言は、神からアンテオケ教会に与えられたメッセージである。
 - ⑥この預言が成就しなかったなら、アガボは偽預言者である。
- (3) アガボの預言は、クラウデオ帝の治世に成就した。
 - ①クラウデオの治世は、紀元 44～54 年。

- ②ききんは、アガボが預言した年に始まった。
- ③ヨセフスは、紀元44～49年の5年間に、何度かききんが襲ったと記している。
- ④特に、紀元46年のききんが激しかった。

Ⅱ. アンテオケ教会の信者たちの準備（29節）

1. 29節

Act 11:29 そこで、弟子たちは、それぞれの力に応じて、ユダヤに住んでいる兄弟たちに救援の物を送ることに決めた。

- (1) アンテオケ教会の信者たちは、すぐに応答した。

- ①ユダヤに住んでいる兄弟たちに救援を送ることに決めた。

＊「援助の物」とは、援助金のことである。

- ②ききんが来る前に、準備を開始した。

- ③全員がそれぞれの力に応じて捧げた。

＊「every man according to his ability,」

- ④組織的に準備を行った。

- (2) ユダヤ人と異邦人との「隔ての壁」は、すでに取り除かれた。

- ①エペ2:14～15a

Eph 2:14 キリストこそ私たちの平和であり、二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし、

Eph 2:15a ご自分の肉において、敵意を廃棄された方です。敵意とは、さまざまの規定から成り立っている戒めの律法なのです。

Ⅲ. 善行の実行（30節）

1. 30節

Act 11:30 彼らはそれを実行して、バルナバとサウロの手によって長老たちに送った。

- (1) 援助金を送ったタイミングはいつか。

- ①通常ルカは、時間の流れに沿って出来事を記録している。

- ②ここでは、テーマを中心に記録している。

- (2) 援助金を送ったのは、使12:1～24の出来事の後である。

- ①ヤコブの死

- ②ペテロの投獄と解放

- ③ヘロデ・アグリッパ王の死

＊彼は、紀元 44 年に死んだ。

(3) 使 11 : 30 と使 12 : 25 は、つながっている。

Act 11:30 彼らはそれを実行して、バルナバとサウロの手によって長老たちに送った。

Act 12:25 任務を果たしたバルナバとサウロは、マルコと呼ばれるヨハネを連れて、エルサレムから帰って来た。

(4) ききんが最高潮に達した時点で、バルナバとサウロが援助金を届けた。

①この援助金は、かなりの時間をかけて集めたものである。

②パウロにとっては、これが 2 度目のエルサレム訪問である。

(5) 受け取ったのは、長老たちである。

①「長老」という言葉が使徒の働きの中に初めて登場する。

②紀元 40 年代に、エルサレム教会に世代交代が起こっていた。

③リーダーシップが、12 使徒から、任命を受けた長老集団に移行しつつあった。

④長老制は、ユダヤ教の会堂の統治制度（長老制）から学んだものであろう。

(6) これは、後にパウロが書いたロマ 15 : 25～27 の原則と合致している。

Rom 15:25 ですが、今は、聖徒たちに奉仕するためにエルサレムへ行こうとしています。

Rom 15:26 それは、マケドニヤとアカヤでは、喜んでエルサレムの聖徒たちの中の貧しい人たちのために醸金することにしたからです。

Rom 15:27 彼らは確かに喜んでそれをしたのですが、同時にまた、その人々に対してはその義務があるのです。異邦人は霊的なことでは、その人々からもらいものをしたのですから、物質的な物をもって彼らに奉仕すべきです。

①アンテオケ教会は、エルサレム教会からバルナバを派遣してもらった。

②バルナバは、アンテオケ教会に霊的祝福を与えた。

③それゆえ、アンテオケ教会は、エルサレム教会に物質的な物を捧げるのである。

④アンテオケ教会は、世界宣教のモデル教会である。

⑤アンテオケ教会は、ユダヤ人信者と異邦人信者の関係のモデル教会である。

結論：

1. 旧約聖書の預言者たち

(1) 預言者の 2 つの役割

①預言者とは、神から受けたことばを民に語る人である。

＊現在の政治状況、霊的状況について神のことばを語る。

②先見者（seers）と呼ばれることもある。

*この場合は、将来を見る賜物に強調点がある（将来の希望を語る）。

(2) 真の預言者であるしるしは、預言した内容が成就することである。

(3) 多くの預言者が起された。

①アブラハム

②ヤコブとヨセフ（ともに夢を見た）

③モーセ

④ヨシュアとそれに続く士師たち

⑤サムエル

⑦ダビデ

⑧エリヤとエリシャ

⑨預言書を書いた預言者たち（前 8 世紀以降）

2. 新約聖書の預言者たち

(1) 新約時代にも預言者たちが起された。

①バプテスマのヨハネ（厳密に言えば、彼は旧約時代の預言者である）

②主イエス（預言者、祭司、王）

③アガボ

④アンテオケ教会の指導者たち

⑤ユダとシラス（使 15 : 32）

⑥ピリポの 4 人の娘たち（使 21 : 9）

⑦黙示録 11 章でその登場が預言されている 2 人の預言者

3. 現代の預言者たち

(1) エペ 2 : 20～22

Eph 2:20 あなたがたは使徒と預言者という土台の上に建てられており、キリスト・イエスご自身がその礎石です。

Eph 2:21 この方にあつて、組み合わされた建物の全体が成長し、主にある聖なる宮となるのであり、

Eph 2:22 このキリストにあつて、あなたがたもともに建てられ、御霊によって神の御住まいとなるのです。

(2) エペ 4 : 11

Eph 4:11 こうして、キリストご自身が、ある人を使徒、ある人を預言者、ある人を伝道者、ある人を牧師また教師として、お立てになったのです。

(3) 預言者の賜物は、キリストが教会に与えたものである。

- ①使徒と預言者は、教会の土台である。
- ②使徒と預言者の役割は、一時的なものである。
- ③一度土台が据えられたなら、再度据え直すことはできない。
- (4) 使徒と預言者たちの役割は、新約聖書が完成するまでの間のギャップを埋めることにあった。
- (5) 今も預言者が存在すると言うなら、次の質問に答える必要がある。
 - ①神は今も教会の土台作りをしておられるのだろうか。
 - ②新約聖書が完成した今、なぜ預言者が必要なのだろうか。
- (6) 預言者を自称する人が現れた場合、以下の点に注意しよう。
 - ①その人が語る預言は、100%成就しているだろうか。
 - ②その人が語る預言は、聖書の教えに合致しているだろうか。
- (7) 聖書を読まないで、使徒や預言者の言葉だけに従うことなどあり得ない。